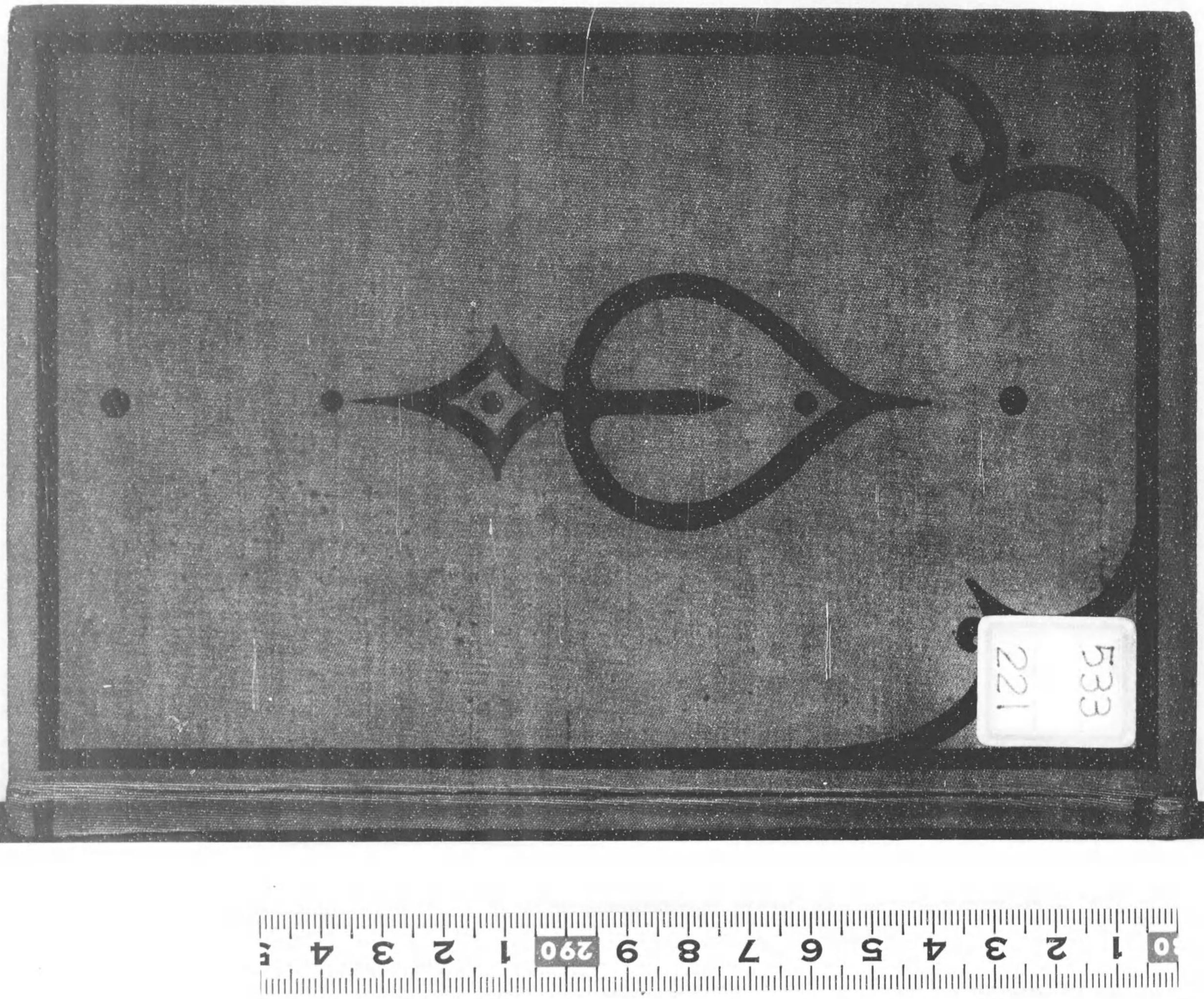
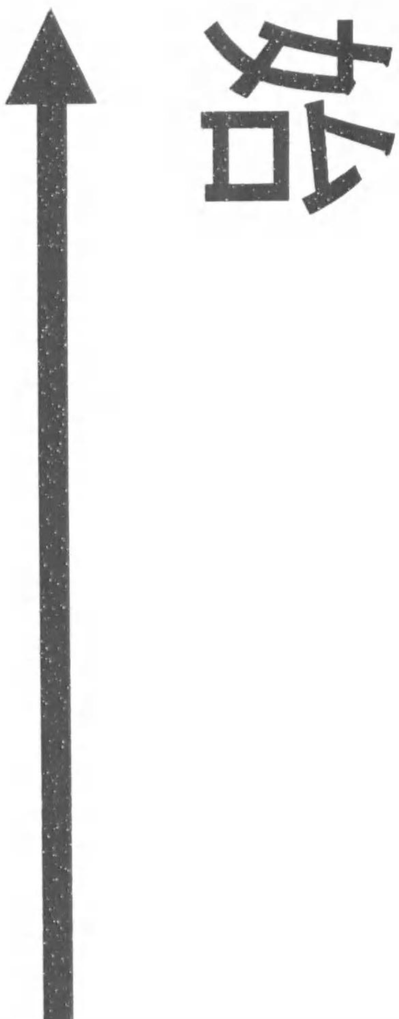
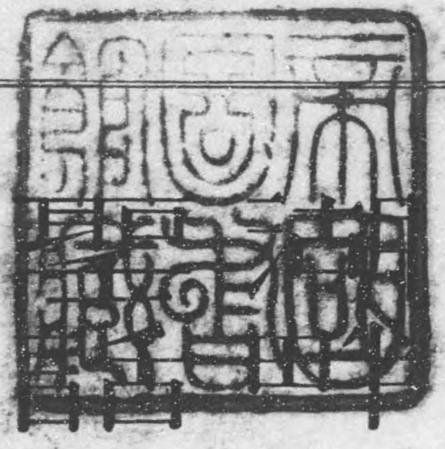


533
221





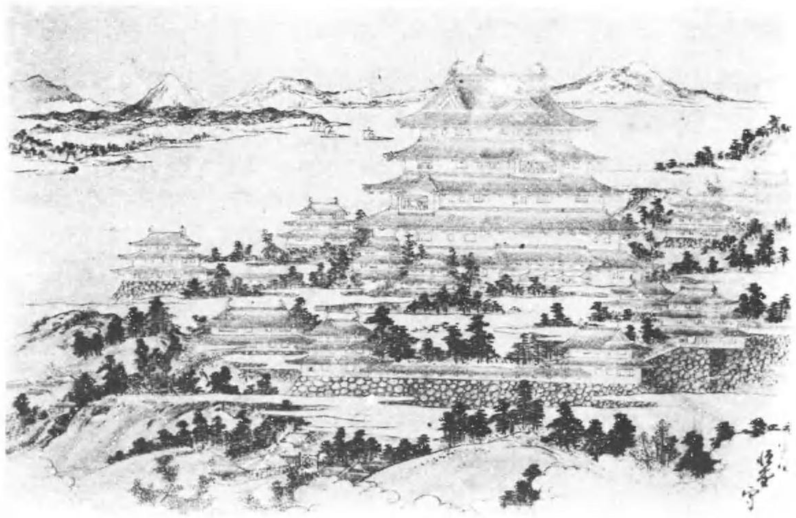
吉田悅藏著

春秋社版

大正
15. 10. 21
內交

近江八幡の裏山、人知れぬ仙境　（畑耕月氏作）

琵琶湖畔、沖の島水道のあたり。



ありし日の安土城

信長の見た安土天主教學校

近江滿生郡の湖邊のある村に三百年佛壇の中に隱された十字架像
土人形にて紅毛のキリスト腰のあたり金襴の古代ぎれを着けたり。

S33-221

序

何年前であつたか、もう餘り久しいことなので、判然(はつきり)した事は忘れてしまつた、確か大正七年の春ではなかつたかと思ふが、私は吉田君に連れられて、琵琶湖畔の村落傳道に出かけたことがあつた。

それはガリラヤ丸が出來て間の無いことであつた。私は自轉車でガリラヤ丸を繫いである堀割の奥まつた所まで驅け付けて、氣持ちのよい船長さんに迎へられた、そして近江の西北部の傳道に出かけた。

一行は吉田君の他に武田猪平氏、青年のチヤタニ君の二人が、私と一緒に行くことになつてゐた。ガリラヤ丸は美い堀割の茅の繁つた間を、湖水の方へ出て行く。あの邊りの景色は琵琶湖でなければ見られない柔かさがある。強いてその例を求めるなら、支那の楊子江の沿岸に似た柔かさである。殊に長命寺（私の記憶が間違つてゐるかも知れぬが）の附近に出て行くと、ピラミッド型になつた山が湖水と相對して非常に美い。それにチヤタニ君の出身地であると聞かされた大

きな島が私の眼には、瀬戸内海の何處かで見る様に、實に美くまた大きく見えた。

琵琶湖は湖水の様な氣がしない。ガリラヤ丸は瓦斯エンヂンの据つた、相當に大きな船であるが、竹生島の邊りに出ると、太平洋にでも出た様に、船が搖れる。安土の城址が右手に輝いて見える。船は北西に進んで行く。二時間も走つたかと思ふうちに、中江藤樹先生の鄕土に着く。私はあの感化の多い尊敬すべき近江聖人の跡を尋ねて、また船に引返した。西近江と東近江は文化の程度に於て、餘程異つた所がある。安土の文化は今日まだ八幡を中心にして、その面影を近江商人の豪放なやり方に殘してゐるが、西近江は何だか遲れてゐる様に思はれてならなかつた。

その遲れた——然し考へ様によつては湖面が水準に落付いてゐる如く、變らざる落付きを持つてゐる——その保守的な湖畔の村々に、ナザレのイエスの福音を話して廻ることは、何となくガリラヤの湖畔を援がせた漁夫の一群に似ないわけでもないと思つた。晝の間にビラを刷つて、晩になると村の公會堂や、旅館の廣間で、子供の會や、大人の會を次々に催して行くのであるが、何とも云へぬ風變りな傳道旅行であると思つた。大抵私は船で寢た。そんな旅行を四日許り續けて、私はまたガリラヤ丸で近江八幡の堀割に歸つて來た。

この風變りな傳道を思立つたのは、勿論、ヴオクス氏である。彼が約二十年前一中等學校の英語教師として、近江に來てから吉田兄を初め、村田兄佐藤兄の様な有力な弟子をつくり、近江に新しい空氣を吹き入れたことは全く奇蹟的な出來事であつた。

織田信長が何故あんな便利の惡い安土に、あの様な尨大な城を築いたか、私は知らない。恐らくは北陸と東海道の敵があすこで防げると思つたからであらう。然し、彼處に咲いた南蠻文明はまた、一種特有のものであつた。信長の信じたキリスト教は、愛の宗教ではなくして、一種のマホメット教の様なものであつたらう。然し、今日ヴオリス君を中心とする近江の兄弟達の手によつて、新しい裝ひを以て安土の山蔭に、再興せられようとは何人が期待したであらうか

信長の雄圖は、近江商人の資本主義的實力の中に今日も殘つて居る。大阪に於ける近江商人の勢力と云ふものは、實に絶大なものである。恐らくは信長の後を嗣いだ秀吉の城下に近江商人が喰入つて、今日尙世襲的勢力が、今なほ保存せられてゐるのだと私は思ふ。そして、不思議にも近江の資本主義の中心は大津市ではなくして、ヴオリスの群が居る八幡町である。であるから近江の實力は八幡町にあると云つても差支へない。そこに不思議な歴史的發展があつて、今日まで

全く忘れられた八幡町が、この芥種の一群で、世界に再び知られる樣になつたのである。つまり近江の兄弟達は、信長時代のキリスト教を、全く新しい型に於て再興すべき使命を負はされてゐるのである。これらの兄弟達は全く、愛と柔和の信條の外何物も持つてゐない。ヴオリフ兄弟も柔和であれば、吉田兄弟も柔和である。吉田兄はあの忙い經濟上の心配の間に、何時も傳道に努力して居る。結核療養所の仕事だけでも、一つの大きなものであるに拘らず、毎年數萬圓を投じて、ガリニヤ丸を中心とする近江各地の傳道事業は、普通の人間に出來ない大運動である。私はこの兄弟達に何時も敬服してゐるので、十數年前から、腹藏なき相談に乘つてゐる。兄弟吉田は私の心より愛慕する友達である。彼は商賣人の仕事をして居る然し彼は天幕を縫ひつゝ傳道した聖パウロの心持ちで、メンソレータムを賣つてゐるのである。彼の得る利益は、決して、一文だつて彼が私するのではない。それを私は保證する。幾分でもその利益が殘れば、結核療養所の經營と、數萬圓を要する湖畔の傳道に使はれてゐるのである。兄弟吉田は、人好きのする男である。永年つき合をしてゐても、厭になる所が少しもない氣持ちのよい男である。彼のお母さんが篤信の婦人であつた如く、彼もまた忠實なるイエスの僕である。私は彼を最も親しい友人の一人

として持つてゐることを、私の幸福の一つに數へてゐる。私は彼の要求することは嘗て拒んだことはない。彼もまた私の要求を一つも拒んだ事を知らない。彼はどんなに忙くても、機會ある度毎に、貧民傳道や、社會運動に疲れてゐる私を、慰めるために、種々と心配して呉れる。彼の文章は平明で且つ優雅である。彼はその文章の樣な人物である。彼がなければ、今日のヴオリスがあつたかないかは、私は疑問にする。兄弟村田が、ヴオリスの左手なら、兄弟吉田はヴオリスの右手である。實業家としても彼は、毛色の變つた實業家である。これ以上私は多く云ふ必要はないと思ふ。彼は必ずしも、仙人の眞似をする男ではない。そうかと云つて、極端な主義主張に現實の人間苦を忘れるような男でもない。私は彼のなすことの凡てに、理解と尊敬を持つてゐる。彼の云ふことを聞いてくれる人は、また私にとつてもよき友人であると考へる。所謂世の實業家と云ふ人々が兄弟吉田の樣な男になれば、日本の問題は大部分かたづくと思ふ。

私は書物の序文の代りに、永年の友人としての吉田悅藏を世間に紹介する。

一九二六年六月廿日　　武總野アンペラ小屋にて

賀　川　豐　彦

はしがき

明治の末年から、大正の初めにかけて、山紫水明の郷土琵琶湖畔の漁村、農村、または若狭に近い西近江路の雪の里、美濃、伊勢、近江の國境、寐物語の里、三國嶽、鈴鹿峠に、程近きあたりを行脚して、或る時は有志數名、或る時は大衆一千幾百を數ふる計りの人達に、圍まれて、御話して來ました、長い月日の紀念の一冊が、この本です。

或る時は御賽錢を投げられ、拍手をしてくれたこともあります、南無阿彌陀佛、南無ああみ、だぶ、と合掌して貰つたこともあります、基督教に入るから金を呉れろと言はれた事もあります、そして息をもつかず、夕方の七時から、十一時頃迄四時間程、身動きもせずに、手に汗を握る如く滿家の聽衆が、熱烈に心を傾けてくれたこともあります。

今、この一冊の内容を讀み返して、まだ〳〵不備と心づく處もありますが、とにかく此の材料を提供しました爲めに、多くの方々に人生の精神的方面を考へて貰ひ、且、或る數の共鳴者が起り、

二十年來同信同行の友を得た事實より推して、また無用の書が、紙屑屋の荷を重くする類のものが生れるのではない事を信じて、世に送り出すものであります。

大正十五年七月。

近江八幡。黨葺の小屋にて
瀧の如く降る雨を聽きつゝ

吉田悅藏

目次

一　一生懸命問題……一
二　喜悅の源……一一
三　全人類の連帶責任……二〇
四　人口問題……二九
五　切支丹……三九
六　喜んで苦しむ……六〇
七　ピックリ論……六六
八　世界の大發見……七一
九　受くるより與ふるは幸なり……七五
一〇　生か死か……八三
一一　神か金か……八八
一二　己の罪か人の罪か……九五
一三　祈る心……一〇三

一四 宇宙の人……一一一
一五 信仰論……一一六
一六 人としての責任……一二三
一七 醒めよ……一二九
一八 災難と我等の行先……一三四
一九 努力すべし艱難すべし……一四二
二〇 痛快……一四五
二一 井戸の蛙……一五二
二二 死！……一五八
二三 破産……一六三
二四 黄金と人生……一六六
二五 日本帝國よ禁酒すべし……一七三
二六 埋れたる生涯……一八一
二七 これを抹香臭いと云ふか……一八九
二八 世界は我が家なり……一九六

二九 安全第一と冒險第一……二〇二
三〇 常に喜ぶべし……二〇八
三一 地球上の生命と永遠の生命……二一五
三二 英雄の時代より愛の時代へ……二二一
三三 小さくなり行く世界……二二九
三四 樂觀と悲觀……二三六
三五 信仰の冒險……二四一
三六 不用意の用意……二四三
三七 勞働者イエスを憶ふ……二四五
三八 ナタン・ブラウン先生の思ひ出……二五〇
三九 裂裝を惜んで坊主を惜むな……二五三
四〇 東洋型の人トマス……二五八
四一 『青』……二六六
四二 東西文明の接觸點の一考察……二七七

一生懸命問題

昔から人の世にいろ〳〵の事件が起りました、そして、歴史となり小説となり口傳となりました、私共の心にはいろ〳〵様々のものがはいつて居ります。毎日ひにちの新聞は、非常に安價にゴタ〳〵した人生の事件を私共に詰め込まず考へて見れば、私共の頭の中は恐しい程複雜な人間社會の記錄で一パイになつて居ります上に、まだ、コレモ〳〵、アレモ〳〵と外側から詰めかけてくる事件の多いこと。

『現代人は、あまりに多くの時間――卽ち人間生活の命の一片――を、安つぼ

い二錢三錢の新聞や數十錢の雜誌などに奪はれて居る。印刷術か製紙業の發達は、增々其傾向を高める』と、米國で近頃賣出しの學者、フオズデイック教授は申してます。

人生の旅の時間は長くありません。

五十年と言ふと長いけれど、一萬八千二百五十何日と想へば短くて、冷汗が出やしませんか。

旅の長さは先づ棚に上げ、後日の話として、さて考へると。

そのゴタ〳〵した夥たゞしい、人間生活の出來事の中で、私共の頭に强く響いて居て、忘れようとしても忘れられぬ事件、いつ何時でもすぐ頭に浮んで來るものは何んでしよう。

赤穗の浪士四十七士の事、楠正成のこと、佐倉宗五郎、西鄕隆盛、乃木大將

のこと等、皆、其鮮血を流して國家や社會の爲めに、命を投出した事件であります。

賴朝、信長、秀吉、家康の傳記に引つけられるのは、生命を懸けて大舞臺に飛び出して行つた、其の歩みに普通人以上の面白さと、大きさを見る爲めでしよう。

其他諸國に遣された、人柱の物語り、人身供養の話、また、惡は惡でも、石川五右衛門、國定忠次、鼠小僧次良吉の話は何んだか、忘れられません。俠客の喧嘩話し等が何故あんなに、人を面白がらせるのでしようか。

それから、生命を懸けた、戀愛のいきさつは、若き男女の血を沸かせます、劇に、文學に、また、現代社會の娯樂から、男女の愛欲の場面を全部無くすれば何が殘りますか、近代の宗教家がこの問題を神聖化し、美化し、又進んで性

慾の問題の精細な點までに達して。社會の人達を指導して居ないために如何に多くの、自殺者や、生ける屍や、爭鬪、殺人、さては、若き癈人、肺患者、神經病者が救はれず、光を見ないか、到底、計算が出來ません。

人生の記錄を賑し、私共の頭に大きな印象を作り、義に勇み、惡を憎む感情を與へる尊い社會の事件は皆、其事に當つた人が、生命を捨てゝ社會の爲めに、後世の爲に、即ち、我々の爲に盡してくれたから、出來て了つた事柄なのです。

一生懸命とは文字通り考へると本當に嚴肅な言葉であります。

私共の少さい、埋もれた一生も、何かの目的がなければなりません、ただ暫くの間地上に生まれて來て牛馬の如く、或は、孔雀の如く、また或る人は猿の樣に、狐の樣に、また狸の樣に、いろ〳〵の生活振りをして、人間の皮を冠

り七八十年暮したとて何の愉快さがありましよう、殊に我日本の近頃の有樣で、人口は多くなり、米も、朝鮮、支那、臺灣、西貢や、カリフオルニア米を我近江の國の小都會にまで持つて來て食つて居る始末、鐵なく、石油なく、綿は實らず、羊毛は無い、衣食住共に事缺いて居る有樣で、どうして豐かな人生が送れるのでしよう、その、せち辛い世渡りをして、何の人生に感激がありますか。

處が局面一變、舞臺が廻つてその感激のない、骨折り多くして、効果の少い人生にも、一度び、神が與へ給ふ、私共一人一人の世に生れた目的がわかれば、今迄の暗闇が忽ち、光明偏照、御光と天人の音樂に醉される程の嬉しさに滿ち、此世乍らの極樂生活、即ちイエス・キリストの、神の國の生活に一瞬間にして、飛込む事が出來ます。

死を直面しても詩人、山村暮鳥は歌つています、

病床にて、

ああ、もつたいなし、
もつたいなし、
けさもまた粥をいたゞき、
朝顔の花をながめる、
妻よ、
生きながらへねば、ならぬことを、
自分ははつきりと、おもふ。

西瓜の詩、

どうも不思議

たまらない、
叩かれると、
西瓜め、
ぱこぱこといふ。

梅

おい、そつと、
そつと、
しづかに、
梅の匂ひだ。

この三首を作り得た人は實に幸福です、第一の詩によりて、病氣に勝ち、第二、第三の詩によりて大宇宙と、大自然の懷ろに抱かれて、安心立命、人生の

目的を悟つてからの喜びの匂ひが、香りも高く、私共の心を叩いて居るではありませんか、人生の旅を強く歩み、其足跡を地上に印する人々は一生懸命、生命をかけて、其旅の一歩一歩を踏み行きます、昔の命がけ、亂世の生命がけは、刀物三昧や、生血を滴らして、磔刑、首斬り、鋸引き、火あぶり、牛裂き、車裂き、釜入りや、水責めでした。

處が今の世は人智も進み、文化も曲りなりに宣傳される、大正の御代です、そして、生命懸けを實行せよとは少々變の様な申方ですが、本當の、生命がけは、三尺の秋水が首の後ろに、ヒヤリと感じてからの數分間など計りのものではありません、即ち、自分の全生涯をかけて、終始一貫、唯だ一つの目的のために、財産も、名譽も、家庭もまたその身の靈も肉も打込んで、盡して行く、平時に於ての生命がけの生き方です、勿論、時と場合によれば、生命を捨てるの

は覺悟ですが、そんな花々しい死方よりも、もつと地味で、もつと社會を根本的に進歩せしむる爲めの、歩み方があると想ひます。

キリストのお言葉のうち、最も偉大なものゝ一つを味つて見ましよう。

キリストの弟子、マタイの書き遺しました、イエス・キリストの傳記の十章三十九節にあります。

『生命を得る者は、これを失ひ、
我がために生命を失ふ者は
これを得べし』

始めの生命とは、此世の罪深い生命です、現世の惡に浸つて大成功しても結局は、零です、たゞ、我がためにとある様に、神の爲めに社會の進歩のために生命を投出して、一生懸命を文字通實行する人は、はじめて、眞の生命を握つ

て、天を仰ぎ、地に伏し、皇天を拜し其地上の一生を送らせていたゞく事を、感謝する人となるのです。

人生の旅は、よろしく一生の目的を見定めてから歩みたいものです。

よつて、なるべくは青年時代の初期に本當の人道を悟つて歩むものとなりたいです。

中年に悟れたら大いに急いで働きませう。

老年に始めて氣のつく人は、最大馬力をかけて宗教の堂奥に入るべきです。

二、喜悦の源

昔から近江の湖水は、いろ〳〵の人物を、引きつけて居ます、其美しい山水の姿は、どれだけ、日本人の生活を豊かにし、どんなに、日本歴史を彩つたか、わかりません、志賀の都の昔より、琵琶湖畔の天地は、實に、懐しい人達の生活した舊蹟だらけであります。

印度哲學の日本に渡來してより、近江の國は特にその感化を受けました、印度教が日本佛教となり、宗教となつて、近江幾十萬の人達は、本當に、先祖代代より佛の道を離れては、生存して居りません。

殺生禁斷を說き、精進をすゝめ、後生を語り、正しき賞罰即ち、地獄、極樂の話を試み、遂ひには、悟りの道までに、民衆を率ひてくれた、佛道は、本

て、天を仰ぎ、地に伏し、皇天を拜し其地上の一生を送らせていたゞく事を、感謝する人となるのです。

人生の旅は、よろしく一生の目的を見定めてから歩みたいものです。

よつて、なるべくは青年時代の初期に本當の人道を悟つて歩むものとなりたいです。

中年に悟れたら大いに急いで働きませう。

老年に始めて氣のつく人は、最大馬力をかけて宗教の堂奥に入るべきです。

二、喜悦の源

昔から近江の湖水は、いろ〳〵の人物を、引きつけて居ます、其美しい山水の姿は、どれだけ、日本人の生活を豊かにし、どんなに、日本歴史を彩つたか、わかりません、志賀の都の昔より、琵琶湖畔の天地は、實に、懐しい人達の生活した舊蹟だらけであります。

印度哲學の日本に渡來してより、近江の國は特にその感化を受けました、印度教が日本佛教となり、宗教となつて、近江幾十萬の人達は、本當に、先祖代代より佛の道を離れては、生存して居りません。

殺生禁斷を說き、精進をすゝめ、後生を語り、正しき賞罰即ち、地獄、極樂の話を試み、遂ひには、悟りの道までに、民衆を率ひてくれた、佛道は、本

當に有難い宗教でわつたのです。

イエス・キリストは、決して、釋尊の敵ではありません、孔子の敵でもありません、よく、世界の三聖と言つて、以上の三人を擧げる人もありますが、この三人が、假りに、一堂に會合されたとて、決して、惡口の火花を散らして渡り合ふとは考へられません。キリストを信ずるものから見れば、釋迦も、孔子も、勿論、キリストの心を知れば、跪いて、イエス・キリストを神の人として、尊敬されるに間違はなく、また、その思想上に、非常な影響を受けることになると考へます。

イエスの言葉に、

われ、律法（道德律、法律、宗教律を總稱して）また豫言者（偉大なる、宗教家人格）を毀つ爲めに來れりと思ふな、毀たんとて來らず反つて成就せん

爲めなり。（馬太傳五章十七節）

とありまして、他の宗教を毀つたりするのでなく、その不足の處を滿して、宗教の目的を成就し、完成することを念願し、私共より見れば立派にその御言葉の如く、成就せしめ給ふたと信ずるのであります。

佛道で、一切是空を悟つて、今世の生活よりも、あの世の生活や、輪廻說を考へて居ますが、イエスは、一切是有を說かれたのです。靈魂不滅、そして、今世の生活そのものですでに不滅の道に入り得ると說かれたと信じます。

一體、ユダヤの、神ヱホバは、

『我は有て在る者なり』と、その昔の指導者、モーゼに、宣ふた、神で、第一に『有』の一字を、神自身だと仰せになつたのです、その『有りて在る』神を、『天の父』と悟られたのが、即ち、イエスの宗教の根本であります、佛道が

『無』を說けば、イエスは『有』を說き給ひました。

松尾芭蕉が、信州路の山道で一人の乞食が旅寢をして居るのを見て

『おきな〳〵起きは浮世の秋を見ん』

と、夢路の生活をして居る方が、乞食には幸であつて決して、起るな、目を醒すなと、歌ひましたのは、何だか佛道の香がします、人生は、彼の言葉を持つてすれば、

『蜘蛛のあみの風の間に存候』

とあつて、はかなく、一陣の風の前の、櫻花の如く、やがて、有より、無に歸る束の間の夢と考へて居る樣子です、

野晒の日記に、

『腰に寸鐵を不帶、襟に一囊を掛て、手に十八の珠を携ふ、僧に似て塵あり、

俗に似て髮なし』

と申てますからには、芭蕉翁は專門の佛道家ではなかつたのですが、深く寂を帶びた心の持主で、彼一流の悟りは慥かに一見識として、把有して居たでしやう、

湖岸、膳所の義仲寺にある、苔むした彼の墓を知る近江人は、どうしても佛敎の骨身に浸んで居ますことは、親讓りだと考へます、

ところが、イエスを信ずるものは、全然考へ方を違へて居ます。

人生は、神の與へ給ふた、永遠の生命の一部と見ます、夢ではありません、眞實の存在です。

ラバート、ルイ、ステヴンスンと言ふ有名な英國の文士があります。天才にして薄命でした、彼は、若くして肺癆に惱みました、明治廿七年、南洋サモア

島にて四十五歳を一期として、勇敢に次の世に移つて行ましたが、その最後に近い頃の日記に、次の様な、愉快な詩がありました、彼の祈りです、

『神様、ニコ〳〵して朝めをさまし、笑顔をたゝへて勞働させて下さい、太陽の世を照す様に、私共の愛の實行のために、この地上の住居を、光輝あるものとさせて下さい』

イエス目を擧て弟子を見て曰けるは、

『爾曹、いま餓たる者は、福なり、飽ことを得べければ也、なんぢら、いま哭者は福なり笑ふことを得べければ也』

イエスの使徒パウロは

『なんぢら慣みて惡を以て惡に報ることなく、常に互に善を追ひ、また衆の人にも善を及ぼすべし、常に喜ぶべし、斷ず祈るべし、凡の事感謝すべし、是

イエス・キリストに由て、なんぢらに要め給ふ神の旨なり』と申て居ります。

人生は、『無』でなく、『有』であり夢でなく、假りの世でなく、浮世でなく、穢土でなく、本眞劔の不滅の世であり、淨土であり、神の國となるべき世であると信じて、天の父の御照覽の下に、喜び勇んで、常に、凡てのこと、感謝して、有意義に、力强く、進んで行くことが、イエスの宗敎の顯れであります、

『宗敎の奥に、喜悅を說くものは、死ね』と言ふ人があります、『そんな薄ッペラな悟りは、何になる』とのゝしる人もあります、

だから、私はキリストの御言葉を揭げたのです、

『なんぢら、いま哭者は福なり、笑ふことを得べければ也』と、

大地震があつて、ドン底の場面にまで、行つて來た人は、水一杯に無限の喜びと、感謝を知ります、人生悲劇の涙の谷より、人間愛の眞味を悟ります、自

己の心を開いて、よく〳〵見れば、そこに罪人の首兒が此俺だと、合點が行きます、その暗い心の底迄、見極めたものが始めて、神の光を受けて、救ひや、信仰の道を發見し、無限の喜悅に滿ちた、神の恩に感激します、

『我等を、キリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危險か、劍か

凡てこれらの事の中にありても

我らを愛し給ふ者に賴り、

勝ち得て餘あり』

と實感するのです、此パウロの言の中の、勝ち得て餘あり、嗚呼この、餘りありとは、嬉しいことではありませんか。やつと、戰に勝つのでなく、綽々たる餘裕即ち、喜悅の心境です、

イエスは、實に悲しみの極みを味つた人なりし故に。喜びの極致に入られたのです、

『求めよ、然らば受けん、

而して汝らの喜悅みたさるべし』

イエスは、十字架に慘憺たる死を見つめつゝも、尙、宗敎の極致は、喜悅であり、神に對する、感謝であることを敎へられ、またその範を示して、私共を導いて下さるのです、

喜悅すれば、希望が湧きます、健康が生れます、心身の健康は、やがて人類への奉仕となります、そして、神の國を建てゝ行く根底が据るのです、

人生に意義あり、求めて、與へられ、喜悅の心を宿し、力强く、社會生活の歩みを運びたいものです、

三、　全人類の連帶責任と社會生活

木曾路の旅をして、『腰に寸鐵を帶びず、襟に一囊を掛け、手に十八の珠を携ふ、僧に似て塵あり、俗に似て髮なき』、芭蕉の俳句に、

『おきな起きな、起きば浮世の夢を見ん』

と、詠じましたのは、ある山道の傍らに木の根を枕として、安々と眠つて居る一人の乞食を見て。詩情に滿ちて創作したのであると言ひます、即ち、醒めて、人間世界の社會生活の苦闘を見るよりは、永遠の夢、醒めぬ眠りの狀態にある、三昧境の、樂しみに安住せよと、乞食の夢を、驚かさずに山道を靜かに通

行したのでしよう。

東洋人の喜ぶ寂の趣き、誠に一幅の名畫の樣に思ひます。

が、イエス・キリストの敎は、これに全く違つた心を私共に與へます。

新約聖書、ヨハネ傳九章より拔萃してこの所を説明させて下さい。

イエス途往くとき、生れながらの、盲人を見給ひたれば、弟子たち問ひて言ふ

『ラビ（先生）この人の盲目にて生れしは、誰の罪によるぞ、己の罪か、親の罪か』

イエス答へ給ふ。

『この人の罪にも、親の罪にも非ず、只、彼の上に神の業の顯れん爲なり、』

それから、この不幸な盲人は、イエス・キリストの救を受け、目が見える樣にな

り。又精神的にも救はれたことが書かれて居ます。

人の世は、たゞ、苦しみの世界、牢獄の生活であるから、浮世を捨てゝ、極樂淨土を求めんとする印度の敎へは、一個人の、救ひ、悟りを大切に考へて社會全體の救ひ、向上、地上の極樂を現世に實現することを考へなんだので無いでしようか。この所は、歐米の個人主義は現世のことに關したもので、それよりも根强き個人主義卽ち永遠性の個人主義が印度の敎の中にあるので無いかと思ひます、イエスは、社會全體、人類全體の救ひ、卽ち、現世に天國を打建んことを、生とし、生けるものゝ、最大の希望であり且、祈願であらねば、ならぬことを敎へられました。

標準の祈願の言葉に。イエスは、

『天にいます、我らの父よ、

願くば、御名の崇められん事を、
御國(天國)の來らんことを
御意天のごとく
地にも行はれん事を、』

と稱へられました。卽ち。地上に神の御意のまゝなる御國の來らん事を祈願せられたのです、

人として此世に生れたものゝ內で、母の胎內より盲目であつた、一生、光を見ない暗黑世界に住む人達程、氣の毒なものはありません、何故、億萬人の內に、私だけがこんな、盲目になつたのであらうかと想へば思ふ程、人生が呪はしくなり、神も佛もあるものかと考へる樣になるのも無理もないことです。

キリストの弟子は、無情にも、一體、人が盲目で生れるのは誰の罪の結果で

あるか、親の罪か、當人の罪かと問ふたのです。現今の科學は、遺傳である、先祖代々の血の汚れの爲めだと申ます。

然し考へて見ると、人は一人々々獨立した存在をするもので親の罪が子に報はれたと雖も、當人、卽ち、生れ來つた子が罪人であり、罰せられねばならぬ理由は無いのであります、勿論、普通以下の不具者と生れては悲慘を極めますが、當人は、神の前に、罰せられる筈はありません、

イエス・キリストのお意見は、この點に就ては、全く明白であります。卽ち、

『この人の罪にも、親の罪にも非ず、只、彼の上に、神の業の顯れん爲也』

神の御計畫によつて、人生に、盲目者や不具者が、生れたのであつて、その盲目の人が、もし、眞の人生を生活するなれば、其不具者なる特徵を持つて、人類生活を豐かにし、淸め、且、向上せしめ、地上の天國、建設設計に、無くてならぬ大切な役目を果すことになる、卽ち、神の業の顯現となると、仰せられたのであります、

不具な人や、病弱の人や、狂人や、惡黨は、また一面より考へると、人間社會が連帶で、先祖代々、子孫代々にその責任を負ふべきであります、一人のビストル强盜があばれ廻ると、全國の警察官が、いろ〳〵の苦心と、金と、生命をかけて捕へようとするのであつて一人の强盜を捕縛するのに、數千圓、數萬圓の探偵費警察費が入用であり、つかまへてからの仕事、卽ち、犯罪の證據調べの費用、裁判の費用、刑務所の費用、さては、死刑にするときの、首繩を締める費用迄一切合切計算すると、大した金額になるのでありまして、その數千、數萬圓の金は、結局、國民の個人々々にかゝる稅金で支拂ふことになります。誠に、一人の惡黨は、私等全體の貧乏の源であります。鐘ケ淵紡績會社の武藤

山治氏の計算によると、近來の日本人は、毎月一家の經濟金百貳拾五圓であるときに、一ヶ年に、國の費用として、直接の稅金、間接の稅金、知らず〳〵の間に負擔して居る各種の國費は、金九拾六圓九拾九錢六厘であると發表されました。その內所得稅の月割七拾六錢八厘の外は全く知らず〳〵の間に國に支拂して居るのです。更に一ヶ月五拾圓の生活をして居る人は、年額參拾九圓拾錢八厘であるとのことです。

右の通りの、稅金は、何に使用されて居るか、卽ち、以前の話の樣な、警察、監獄、裁判の費用、軍隊の費用、軍艦、殺人毒瓦斯、大砲、水雷、潛行艦、爆擊飛行器、等、等、等と、全く、人類の幸福に、直接何の必要もなく、惡魔大王の仕事の爲めに、何拾億、何百億、否何千億を惜し氣もなく、湯水の如く金錢を浪費し、人の生命、勞力を使ふて居る、現代の文明は、實に脫線も甚し

い哉、と申べきであります。

ですから、近代生活をして居る私共は、自分だけで、安全な生活は出來ません、大きく、國家としても、一國だけが、安全な存在は出來ません、世界全體の人間生活が、安全になる迄は、誰一人も、安心が出來ぬ筈であります。

人類は連帶責任です、私一人だけ救はれても、そこに他の救はれぬ人があり、親兄弟が、地獄の苦しみに沈んで居る時は、極樂も天國も、自分には何の樂しみのない處となるでしよう。

キリストは、人類全體の救ひ、卽ち、神の國の來ることの爲めに、祈願せよ、努力せよ、生命をかけよ、十字架にも恐れずかゝれと、私共に敎へられたのです。

勿論、最後迄、神に叛く、罪の人は、罪そのものゝ結果として、神の愛の中

に生きることを得ず、終局には滅亡するのでありましよう、丁度、世間の有りふれたことの様に、信用を落し、顔を自らせばめて、五尺の身體の置き處に困り、肩身がだん〳〵狹くなり、人の中に顔も出されず、陰も失せて了ふ零落の人の様に、魂がだん〳〵小さくなり遂に滅、滅亡、有より無の終末を告げるであります。

神に救はれる魂は、これと正反對に、いよ〳〵擴大され、新天新地に活歩して無限の生命と、永遠の愛の中の生活に入るのです、そして、その様な魂の總合計は神の國を作るのです。

要は人類の生活はお互の連帶責任であること人類全體が救はれ、理想の地上生活、天上生活をなすことの爲めに私共一人々々は生れて來たのであることを悟るのが、キリスト教入門の第一歩であることを、説明したのに過ぎません。

四、人口問題

飛行家が、數千メートルの上空より、地上を見ると、山や、湖水や、田畑や、都會や村落が、流れる様に、ズン〳〵變つて行く。丁度、地圖を擴げて、動かす様に見えるのです。

大日本と言ふ物質と、精神の團結を高所より見て、その全幅を知り、其移り變りを洞察するには、海外に出でゝ、顧り見るに限ると言はれて居ます。

不二の秀嶺は、慥かに世界的であり、近江の鴉の湖はまた世界に數少い艶麗さを持つて居ます、私は歐米の名山を數多く見ましたが、北近江路の連山、愛

知川奥の清流や飛彈と信濃の國境、日本アルプス邊の雄大な山嶽の風景は實に比類の少いものであることを知つて居ます。

山紫水明、地形の變化、春夏秋冬の廻期の美、花の色の、あでやかさ、實に日本國は世界の公園の如く、美しい國であります、たゞ、空氣が常に水蒸氣を含んで居て、日本晴の好天氣と、藍碧の空に、星近く燦爛と輝く夜の空の少いことを遺憾とします。

冬は、濕氣の爲めに、寒さは骨を震はす程、浸透力を有し、夏は、蒸し暑く、流汗淋漓、到底窮屈なる、カラ、カフスを要する洋服生活に適せぬ日本獨特の暑さに、內地生活の苦闘をせねばならぬことを遺憾とします、一時、日本人の生活は二重生活をして不經濟である、洋服と和服と、靴と下駄と、フロックコートと紋附の生活を打破せよと叫ばれましたが、私は、新日本の生活は世界生

活とすることを主張する一人です、即ち世界の最も善きもの、進歩したるもの、總てを心行く計り、利用して、祖先以來の國風で、國粹である、攝取、同化、改善、日本化の傳統によりて人類生活の模範を日本人によりて樹立すべきであると思ひます。偏見と、誤解と、頑迷な化石した考へ方をすてゝ、徹底的に、世界生活に突入すべきであると思ひます。

世界の樂園の如き日本は實に、旅行者の國であつて、實際生活を營み、子孫代々永住の地、安居の國土としては、あまりに藝術的で、詩的で、米とパンと、綿と毛皮に不自由であります、太洋中の數ヶ孤島群であつて、大陸でありませんから衣食住に事缺く自然的恩寵の豐かならざる國土であります。

鎖國封建の時代は人々が殆んど固定して、數百年の間は殆んど增殖して居なかつた國です、それは、海外より豐富な衣料と、食料の供給を受ける工夫を有

しなかつた昔の人が近頃流行の産兒制限よりも更に強く、人口問題に痛感して止むを得ず、生れ兒を世に育たしめなかつたからです。

『まびく』、『たこをしめる』、『をろす』、『しまふ』、『孕み妻を男に見せぬ』殺人の罪惡を犯しても、當時の脅威であつた衣食の問題、饑饉の時を豫想して、自然に對する戰鬪行爲として家族の增加を制限したのであります。

尤も、軍人階級の人達は、男子の出生を歡迎し、十四五歳より初陣せしめ敵の兜首を擧げる勇士の數多きを喜び、美しき婦人が、政略の贈り物となる爲めに一人よりも多からん事を期した、亂暴な戰國時代もありました、が、全國の人口には多大の影響はありませんでした。太平の御代となれば人口も自然に生活難の爲めに落付いたのであります、戰亂は人類生活の最も恐るべき罪惡であり、病氣であり、人災でありますが、昔より戰爭の時は刀槍の渡り合ひ、彈丸

の命中の死より、不自然な生活の爲め、傳染病で死んだ人の方が多いとも言はれました、近代の戰爭は醫術の發達と、組織の完備の爲め、後方勤務が行屆くので、爆彈、毒瓦斯、機關銃彈で多くの人がやられます。

それでも、戰亂の爲めに死ぬ人の數は、文明進歩の爲め、增加して行く人口と比較すれば、到底少數で問題になりません。日本の人口は、今より百十年前、光格天皇の御代、文化十三年の二千五百六十餘萬人より大正十四年の五千九百萬となる有樣で、百年に二倍以上に達しました。

悉しく調査しますれば、明治元年より約六十年して二倍にあたつた樣子です。

明治五年	三三、一一〇千人
同十五年	三六、七〇〇

同　二十年　三九、〇六九
同　三十年　四三、二二八
同　四十一年　四九、五八八
大正二年　五三、三六二
同　九年　五五、九六二
同　十四年　五九、〇七三

昔の統計は正確でないでしようが、大體當つて居ましよう、

國勢調査は大正九年からですから其後は正確でありましよう。

此速度で人口が增加すると、百年後の日本は二億人見當になりそうです、現在の小學校生徒の生存中に、一億五千萬に近づくでしよう。

國土の小さい日本、米國の一州カリフオルニアより小さい國に、どうしてそ

れだけの人が生活出來ましよう。年々、七十萬の人口が增加しますが、かりに七十萬の人間を海外に移出するとし、行先を南米ブラジルあたりとすると、勿驚、一萬噸級の汽船が、たゞ人を運ぶだけで百七八十艘必要です、一船に貳千人の人間を蠶棚の樣に詰め込み、一年二往復として、我國の汽船全部で約三百萬噸ですから、日本郵船、大阪商船、東洋汽船の諸會社を全部打つて一丸として、その中の遠洋航路船、優秀船の全部を年々增加して行く人々の移住に廻しても足らぬ有樣です。

玆に產兒調節と言ふ必要が起り來り又、生活苦が恐ろしい顏を出します。

人口論の元祖とでも言べき人は、英國のキリスト敎僧マルサスであつた事は隱れもない事實です、人は鼠算で增へ食物は加算で增へる、どう仕樣かと言ふのです。一體キリスト敎は殺人を極端に罪惡視します、自殺も殺人と見ます、

そして人類は同胞であつて、戰爭すべきものではないとします、處が、今の人口增加の有樣は、遂に世界を擧げて食物を奪ひ合ふ大修羅場に指さして出發して居る樣子です、大いに考へる必要があります。

地球の表面は限られて居ます、現代の智識を持つてすれば、徹底的の調査をして、世界の中に何人の生活が保證されて居るかと確める事が出來るでしよう、その調査をして後大いに地球上の人類生活、人口の移動に考を及ぼす必要があります。

廣大な土地を稀薄な人口で、占領して人を入れぬ、米國、濠洲、カナダ、英國の領地等は實に神の前に罪を犯して居ると知ります。

人口問題で考へれば考る程、いろ〳〵と問題は複雜となります、未來は現在より益々生活問題が困難になり行くことは今の世界の人々では、事實らしい

です。

現世に於て、天國實現の理想を確守するキリスト敎者は、人口問題につき、徹底的の、信仰と、智識と實行とを双肩にかけて、大いに社會の改善を成就する必要があると思ひます、つまり、罪惡の分子を世界より減少せしめ、神の子、光の子の分子を多く作り出すことの努力なんです。また一面、近代の社會を見れば實に不必要のことに、人命財產を惜氣もなく浪費して居ます、陸軍、海軍の費用。警察、裁判所、監獄の費用。酒の製造、煙草の製造。不必要な新聞雜誌、書籍の濫造。火事の損害、實用でない贅澤品の珍重、等々數へれば數へる程限りもなく、人間生活の無駄に、想像にもつかぬ大金を捨て、勞力を浪費して居ます、社會生活がもつと合理化すれば、たしかに生活問題を、今から百年二百年の間苦勞せずして、露西亞のクロポトキンの理想社會の如く、勞働は

各人一日三時間にして、有福な人間生活が出來ることになるでしよう。

イエスの敎と、この、こみ入つた人間社會の人口問題、生活問題に何の關係があるでしようか。

イエスの敎の奧義は、たゞ一言にて盡きます、曰く、

『己の如く、なんぢの隣を愛すべし、然らば凡て人に爲られんと思ふことは人にも亦その如くせよ』

そして、イエスの宗敎の信仰の果は『愛、喜悅、平和、寬容、仁慈、良善、忠信、柔和、節制』であると、使徒ポーロは申ました。

形式の宗敎、寺院、敎會堂に閉ぢ込められた宗敎は近代の社會問題を解決する活力がありません、祈りは祭壇の前、會堂の中に跪くこと計りでなく更に一歩を進めて、實社會の生活に、前に述べた、『愛の實行、信仰の果を結び』つ

つ生活し、全人類の將來を念頭に置き大ひに毎日の生活を有意義に送るにありと思ひます、玆に本當の、宗敎生活、即ち人道生活があると信じます。

五、切支丹

上

近江の國蒲生郡安土村、豐浦の里に。『大臼』と言ふ名を持つて居る土地があります、安土城の大手を右にして、運河の流れの曲り角にある一枚の田地であります。大臼はラテン語の、『神』と言ふことであつて、切支丹の名前であることが明かであります、その地は昔、織田信長が安土市中の一區の土地を、宣敎

師オルガンチノに與へた處であつて、當時安土では佛寺は一宇も建立することを許さず、たゞ、基督寺だけを建てることを許したのであります。攝津高槻の城主、高山右近は、人夫千五百を寄附して、工事を助け數ヶ月の間に『大成寺』と名を與へられた切支丹寺が出來上つたのであります。

今、『大臼』の土地は、大成寺が明智光秀の亂に、安土城と其運命を共にしましたので、燒瓦一枚も殘らず、奇麗に片づけられ江州米の產田として、美しい稻の波が打つて居ます。

安土には大成寺の外に、切支丹の神學校もあつて、木造三階建の、西洋館であつた事も、當時のスケッチによつて知ることが出來ます。

近江觀音山城の城主、近江源氏の佐々木義堅は其夫人と偕に洗禮を受け、安土に居住して居たのであります、そして乃木將軍は近江源氏の嫡流ですし佐々

木神社も、切支丹と緣故の全然無い譯では無いのであります。

一體、戰國時代、元龜、天正の頃は亂世でありましたが、日本民族は、德川の鎖國時代の樣に小さくなつて居ませんでした、堂々、東洋を威壓し、世界に乘り出す意氣と、力を持つて居た樣です。

湖水渡りで有名な、明智左馬介の陣羽織は、緋ラシャで、ハイカラな舶來品でした。ハイカラと言へば、織田信長は、其道の大將で、南蠻笠を頂き、家來には、黑坊主を使用しました、南蠻笠は、黑羅紗の帽子であり、黑坊主は、アフリカ人でありました。

金米糖、パン、カステラ、煙草、カボチヤ、シヤボン、ビロード、メリヤス、サラサ、金巾、羅紗、ドンタクの如き言葉は、切支丹宗門と一しよに日本に這入つて來たのです。

切支丹寺は、いろ〳〵の處に出來て居ました、近畿地方には、京都、高槻、飯盛、若江、八尾、岡山等にあつて、盛んな祭禮があり、行列があり、音樂隊があり、キリストや、聖母マリアの像を擔ぎ、高槻では、信徒一萬五千も集つてお祭りをしまして、世界大戰爭前のロシヤやイタリーの祭りの樣に、盛んでありました。京都の、祇園會はその名ごりであると言ふものもある位です、それから、御祭りのあとは、黑ん坊のダンス會があつたさうです。

亂世の雄、織田信長は『人生僅かに五十年』と叫んで、桶狹間で、今川義元を倒した程の精神家であります、人生問題については、特に思考力のあつた人でした、新宗敎切支丹によつて、戰國時代の民心を善導しようとしたかもしれません。

半途にして光秀の手に倒れたのは、日本帝國の國運については殘念なことで

あります、信長が家康の樣に長生きであつたら、或は、現代の樣に日本は人口問題で行きづまり、世界のどこからも、排日を喰つて、引込んで居る樣な有樣に、ならなかつたかも知れません。信長の死後に、切支丹大名が大勢ありました。關ヶ原の戰爭に出かけた切支丹大名の名を擧げると。

西　軍（藩翰譜三河風土記切支丹大名記）

美濃岐阜の城主　織田秀信
丹波福知山の城主　小野木縫殿
筑後山下の城主　築柴廣門
阿波德島の城主　蜂須賀家政
元の府内の城主　大内義統
肥後宇土の城主　小西行長
筑後久留米の城主　毛利秀包
對島列島の城主　宗義智
豐後佐伯の領主　毛利高政

東　軍

近江大津の城主　京極高次
伊賀上野の城主　筒井定次
豐前中津の城主　黑田孝高
信州高遠の城主　京極高如
豐前中津の城主　黑田長政
下野宇都宮の城主　蒲生秀行

田邊の城主忠興嗣子　細川忠隆
陸奥弘前の城主　津輕爲信
日向飫肥の城主　伊東祐兵

中立

丹波篠山の城主　前田玄以
肥前有馬の城主　有馬晴信
五島宇久の城主　五島純玄

丹波峰山の城主　細川興元
肥前唐津の城主　寺澤廣高

肥前大村の城主　大村喜前
若狹小濱の城主　木下勝俊

隨分澤山あつたものです、關ヶ原以前には、大友宗麟、大村純忠、內藤如安、高山右近、池田丹波守等數十名の大名が切支丹宗の信徒でありました。

信長秀吉時代の全日本人口は、千五百萬人位です、(その時英國の人口は四百七十萬位でした)そうして切支丹信者の數は、約十五萬人ありましたから、日本全州に百人につき一人の切支丹があつたことになります。

天文十八年七月三日、フランシス、ザビエーが、九州鹿兒島に到着してから

僅かに三十有餘年にして、全人口の百分の一、しかも當時の有識者を信せしめた、切支丹宗は實に、猛烈な勢ひであると言はねばなりません。

豐臣秀吉は、其晩年に、切支丹の禁止、迫害の政策を實行しました。

德川家光の世となつて、遂に、切支丹は九州天草島原の戰爭の結末と共に全く、全日本よりその影を失ひました。

切支丹禁札は、全國の津々浦々迄、立てられました。

定

きりしたん宗門は累年御制禁たり、自然不審なるものこれあらば申出べし御褒美として、

銀五百枚

ばてれんの訴人

いるまんの訴人　銀三百枚
立かへり者の訴人　前同斷
同　宿並に宗門の訴人　銀百枚

右の通り下さるべし、たとひ同宿、宗門の内たりといふとも、申立る品により銀五百枚下さるべし、かくしおき他所よりあらはるゝにおいては其所の名主並五人組と一類共に可行罪科者也

正德元年五月　日　　奉行

慶長年代の日本切支丹信徒數は三十萬人もあつた樣ですが、だん〳〵減りまして、慶長七年には二十萬人になりました。

そして、切支丹嚴禁の爲め、殺された信者の數は、新井白石の遺書に、二三十萬とありましたが、正確に調査すれば或は六七萬人であつたゞらうと言ふことです。その全部が信仰のために死んだのではありませんでしようが、兎に角、主義と主張と、信仰の爲に、命を投げ出して事に當つた人達が、數萬もあつた事は一面、我國の歷史にこれ以外絕無の、言論、思想壓迫の恐怖時代を演出したのですが、又一面、我同胞が如何に主義の前に、忠實であり、眞理の爲めには、如何に勇敢に、生死を賭して、奮鬪するかを證明したもので、實に、切支丹武士の言行は、世界に、日本魂ありと、宣言するに足るものであります。

文豪にて史家である、德富蘇峯氏は、ある日、賀川豐彥氏に語つたさうです、

『日本に於ける切支丹敎徒迫害の歷史は、世界に誇り得る最も偉大な道德の歷

史であつて、日本國民の精華は實に切支丹精神によつて、發揮せられて居る。元龜、天正時代の武士道等と言ふものは實に劣等なものであつたが、たゞ一つ、切支丹の間に眞の國民道德を發揚してくれたのである』と。

切支丹は、根底より時の政府の禁壓によつて、滅びましたが、その宗敎は決して、死滅しませんでした。

幕末に、長崎、浦上村事件の起つた時、數萬の切支丹信者があつて、德川幕府が死を以て、迫害して居たにも不拘、切支丹の宗敎を奉じて居たことが、明かになつたのです。

明治維新となり、切支丹は默許の狀態から、遂に明治六年二月十九日、切支丹禁制高札を撤去し、政府は基督敎を公認し、後明治廿二年憲法發布の時、全く、日本臣民の信敎の自由を認めるに至つたのであります。切支丹は寛永十五

年以來、明治六年迄、二百三十五年間、全日本に於ては、邪宗門にて、嚴禁されて居ました、それが、前述の順序で又再び其光を世に輝すに至つたのであります。

切支丹とキリスト敎のことは尙其敎義につき次回に書きましよう。

きりしたん禁制札中に、

ばてれん　とは、敎父の意味です、伴天連、とも書きます、ポルトガル語です。

いるまん　とは、ポルトガル語の兄弟と申すことで、宣敎師のことです。

下

切支丹宗は又、切死丹宗とも書きます、切られて、死ぬる、宗敎の意味でしよう、いつでも、迫害をする方の側は必ずその目的を達する爲に、まづ相手方に惡名をつけます、そして、その惡名の成功不成功は迫害の効能に大關係があ

ります、『大義名分』と言ふことには自分側の正義を主張するのみならず、進んで敵を惡鬼惡魔の如く、のゝしることになります、あのロシヤの虚無黨の元祖バクニンの言ふが如く、

『一體此の世の資本家や金持ちは、社會の血を吸つて生きて居る動物である、我等は彼等を人間だと思つて言ないのだ、狼や虎の如き、否それ以上に惡いものだ。故に撲殺して決して良心に苦痛はないのである』と宣言して居ます。

昔の切支丹迫害には、この心理が猛烈にあつたものです。

織田信長、小西行長、黒田如水、伊達政宗、明石左近、蒲生氏郷などによつて保護され發達しました、昔のキリスト教運動は、天文十八年七月三日、鹿兒島に到着した、偉大なる宣教師フランシスコ、ザヴエーの信仰宣傳に始つて、德川家光時代の島原の戰爭となり、鎖國令となり、切支丹撲滅となり、寛永十

五年にて、全く、日本國の表面には、切支丹信徒の影を見なくなりました迄、合計八十九年間に信徒、數十萬人の信仰はあらゆる惡名を着せられて、滅亡して了ひました、キリスト教が始めて日本に來ましたのは、奈良朝時代、そして、聖武天皇の頃であると學者は申して居ります、其頃の支那は唐です、高野山の開祖、弘法大師、比叡山の開祖、傳教大師が入唐した頃は、支那の都、長安に、キリスト教の一派、ネストリアンの教碑が建てられて後二年した頃でありまし、そして、碑文の選者、ペルシヤ僧、景淨アダムは、長安府の西明寺に居たのであります、弘法大師は、西明寺に寄宿して居たのです、そして、印度梵語の先生は、ネストリアンの、アダム師の友人で、般若法師であつたのです、弘法大師は、この景淨アダムに合つて、明かに其キリストの教に接したのであると想像されます、大師は灌頂を行ひましたが、或は、その、大慈大悲の水を、

頭に灌ぐ儀式は、キリスト敎の洗禮であつたかも知れません。

支那では、この一派のキリスト敎を景敎と申して居ります。

日本の社會奉仕の歷史の內に最も光を放つて居ます、あの有名な、聖武天皇の皇后、光明樣が、奈良に、悲田院、施藥院の兩院を設けて、天下の病苦や、餓饉の爲に、大に慈善事業を起されたこと、更に、浴室を建て、貴賤のもの千人に浴を賜つたこと、癩病人に奉仕されたこと等は、景敎を通じて、我國に及ぼせし、キリスト敎思想の感化であることの可能性の多いことは實に不思議な、神の攝理と言はねばなりません。

光明皇后の光明は、大なる光と申す義にて、景敎の景の字より出たものと考へられて居ます。

されば、奈良の大佛の建つた頃は、既にキリスト敎が日本に其感化を及ぼし

たと申すことが出來る次第で、今より約一千二百年の昔であります。

一體キリスト敎は、佛敎と混同されて渡來しました、そして、敎會のことは、昔は皆、寺と申して居たのです、安土の大成寺、京都の南蠻寺の如くに。

熊澤蕃山は、キリスト敎を南佛、佛敎を西佛と申して居たのです。

德川時代にては、『極惡非道』と言ふ、惡名を、切支丹にかけて、ドシ〳〵磔刑に處し、火あぶり、鋸引き、斬首にしましたが、信徒の死に樣が、あまりに信仰的で勇敢であるので、殺し手の方が恐ろしがり、遂に、切支丹バテレンの魔法と言ふことが、日本人一般の信ずる處になつたのです。

政府に對して弓を引くものは皆、切支丹國賊と言ふ事になり、由井正雪も切支丹だと言はれたのです。

二三十年前迄、『ヤソは國賊』と無條件に唱へられ、記者の如きも少年時代、

國賊扱ひにされて、頭を叩かれ顔を堂突かれて、鼻血を出したこともあります、舊幕時代無批判に、御上の布告をそのまゝ有難く頂戴して居た時の、即ち『泣く子と地頭』には勝てず、『御無理御もつとも』の哲學によつて養はれた民衆は本當に『ヤソが國賊』と思つたのでしよう。

さて、いよ〳〵本論に入ります。

切支丹が、戰國時代の日本に、何故あんな工合に都合よく大勢力となつたかを考へて見ますと。

一、政治的に利用されたこと、

二、外國貿易の利益の爲め利用されたこと、

三、儒敎、佛敎、神道が本眞劍な信仰安心を國民に與へて居なかつたこと、

四、新思想を傳へたから

其他いろ〳〵の理由がありましよう、私はあの時の切支丹宗で日本が全體として敎化されたなら、或は現今のスペインやイタリーの如く、舊敎國になつて反つて本當のキリストの宗敎に入る時に躓きとなつたのではないかと考へます、昔の宗敎は、大概、天降り式で、大名が信仰を始めると、その臣下は、文句なしにその信者となりました、つまり個人的自覺によつて、宗敎を握るのではなかつたのです、家長が門徒宗なら『家族一同その通り』その通り〳〵と無自覺に服從して信者が增したのです、この有樣は、佛敎も、キリスト敎も、變りありません。

ローマ帝國は、キリスト敎の迫害で、最も有名であります、數百萬の人を殘忍な手で殺したのです、處がそのローマ帝國のコンスタンチン大帝が、紀元三百十三年に基督敎の公許を宣言し、其國禁を解いてから、歐羅巴の世界は、キ

リスト教の洪水が起つた様でした、何しろコンスタンチン大帝が當時の世界の王冠を着て、紀元三百二十五年のニカヤ會議に――ニカヤ會議は、その頃の全世界キリスト教教理決定についての大論爭會議であつて、丁度、比較には小さいですが、織田信長が威光赫々として、安土の淨嚴院で、安土宗論をさせ、日蓮宗と、淨土宗の優勝仕合をさせた様なものであります、――ニカヤ會議に王座を作り黄金の椅子によつて、宗論を聞いたのでした。

そして、キリストの教は少數の人を除いて、所謂『國教』となつて了つたのです、神聖ローマ帝國と言ふ様な、變なものが出來たり、ローマ法皇と言ふ變態的の威力が歐羅巴に出來て、最後迄、地球は平たく、太陽は地球の周圍を廻るものであると勝手に決定して、科學を壓迫し、それに反對の意見を申ものは、皆、監獄に、投げ込んだりしました、そして民衆は、長い間、『御無理御もつと

も』の生活をするし、靈魂のことも、國王の命のまゝ、家の主人の意の如くに考へずして、信仰を空握りして居たのです、私はこの『信仰の空握り』程恐ろしいものはないと思ひますイザと言ふ時は全く精神的に力がないのですから、力の出様がないのですから。

信仰のことは、天降り式で、大衆數千萬あつても、何の力でもありません。本眞劍になつて、神と、私の關係、人生の目的を悟つて居る宗教家でなくては、たとへ世界が全體キリスト教世界、佛教世界だと稱へられても『眉つば』ものです、宗教の信仰は人數や寺の數や、教會の數でだまされてはなりません。

得手して、淺草觀音の後ろに吉原、前に魔窟があり、伊勢には古市あり、本願寺には、島原遊廓があるので油斷も、すきもあつたものでは有りません、政

治家はよく、宗教を利用したがるものです、しかし、宗教は心の世界の最も尊い聖さ高さ寶座につくもので、決して、利用されるものではありません、宗教は人の心を支配する力でありまして、人の心を支配するものは、やがて、政治も文學も、其他、社會生活の全般を支配して、神の心のまゝに、現世を、天國化するものです。

政治家によつて利用された、宗教、保護された宗教は必ず滅亡します、墮落します、キリストのイエスの宗教の本分は、全人類の心を支配することです、そして、政治家の心も勿論支配すべき原動力を持つて居ます、即ち、『神の御心』です、今や昔の型の宗教は滅びつゝあります、新世界に旭日の如く、東天紅を宣するイエスの宗教は、一人一人の心の最奥より芽生へ、ついに全世界を握る、愛と、義の兩腕となつて出顯しつゝあるのです。

昔の切支丹の宗教全體としては、私共の心にある宗教の考へと大分違ひます、然し、その信者の中の少數の本眞劍の人達は、同じ、イエス・キリストの信者でありました。

これからの、イエスの宗教を信ずるものは、威武に屈せず、富貴に淫せず、靜かに強く、本心の最奥より一人々々が理解と、信仰を持つて、生命がけで、把持して行く、永遠の力、イエスの人格、神の御子の列に加入して歩むべきものと考へます。

六、　喜んで苦しむ

喜んで苦しむと言ふことがあります、例令ば、碁打ちが汗水になつて夜通をする樣なもので、血眼になり頭が熱くなつて苦しんで居るにも不拘、夜通をするのは喜んで苦しんで居るのであります。

夏の炎熱骨身を焦す樣なときは木蔭で午睡でもして居ると涼しいのに、竹刀を振り舞はして流汗瀧の如くなつて立廻りをする人も少くないのは喜んで苦しんで居るのであります。

喜んで苦しむと云ふことは我を忘れて了つて或る目的の爲に骨身を惜まぬ狀態を云ふのであります。

人は物に熱中すると此狀態になります、面白い小說を讀んで夜明しをやります

す、儲け口でもあると商賣人はじつとして居りません、我を忘れて奔走します、嫌な金の苦面もします、豐年の歲の穫入は百姓衆の我を忘れて働くときであります。

自分を忘れると云ふことは熱心であると云ふ證據であります、例令ば胸と腹との間に、胃があると云ふことを常に覺へて居る人は胃病にかゝつて居ります、丈夫な人は胃があることを忘れて居ります、今日は飯を一杯餘計に食つたなどゝ心配しません。

肺のあることを常に毛頭忘れません人は肺病人であります、健康な人は胸をたゝいたり、呼吸を心配することはありません。

我等は人生の旅に此喜んで苦しむこと即ち我を忘れることを悟りますと、非常に樂しい生活が出來ると信じます。

キリストを信仰すると、此呼吸を己のものとすることが出來て如何なる場合にも失望せず、活路を切開いて揚々たる事が出來ます。

『われらキリストにより信仰によりて今居る處の恩に入ることを得かつ神の榮を望みて欣喜をなせり蓋患難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ希望は羞を來らせざるを知る』

此言は何たる勇ましい言でありましよう、此文の作者は第一世紀の偉人、パウロであります、彼は當時の世界でキリスト教傳道のチャンピオンでした、教の爲めに幾度か殺されんとしました、其の身は病身でありましたようです、生活の爲めに、天幕を作りました、終生獨身で人生の總ての苦難と戰ひました、そして最後に教に殉じました、其傳を讀みますと彼ほど危險を冒して患難を突破した勇者は誠に世界に少數であります、人間歴史の中で偉觀を放つて居りま

す。

彼はキリストの言

『其十字架を任りて我に從はざる者も我に協ざる者なり、其生命を得る者は之を失ひ我爲に生命を失ふ者は之を得べし』とあるのを體得したのですから右の如き盛んな言を吐く、患難にも欣喜をなす人物となつたのです。人は其人間となつて生れて來たのは何故であるかを悟つた時は、其の人が活動を始める時であります。己は何の爲めに生れて來て居るかを知らない人は憐れな淋しい人でありまして患難が來ると自殺したり狂人になつたり、脱線して獄屋に入る樣になります。

キリストを信ずるものは其一人一人が己の世中に生れた目的は何んであるかを悟つて居ります、そして其目的の爲めには苦しいことも喜んで實行する事が

出來るのであります。

キリストの說き給ふた人生の目的は宇宙の間に於て人間の位置を高め、神の完全な如く我等も完全になることです、神の國を現世に打建て完全な極樂世界を神と我等が協力して地上に打建つることであります。

死んで後に極樂世界があるのでなく我等銘々は此世を極樂世界とする爲めに生れて來て居るのです。

此目的が悟れましたら、惡いことをして苦しむのは當り前で、善いことをして苦しむのが人間の人間たる解けであるから喜んで苦しみたいものだと、人の嫌なことでも椽の下の力持でも樂んで行ふ樣になります。

昔、キリストと弟子は迫害されて散々な目に會ひました其時

キリストの名の爲めに辱を受るに足る者とせられたことを喜びました。

我等は人樣の爲め難儀するに足る者とならねばなりません。

近江の或る本願寺派の寺の獨り息子がキリストを信仰しました、そして家族の反對で隨分苦しんだ上家を出ました、幾度か記者と共に泣きました、祈りました、彼の母は彼の出した手紙と彼の出した愛の贈り物の小包を突返しました、彼の友は彼の心を知りません、其以前の內容のない生涯は彼の親と其の友の彼にのぞむ處でありまして、禁酒禁煙端嚴な潔白な生活をしてキリストの敎の奧に入り其新らしい信仰の力を以つて國に盡し親に盡さんとする健氣な心は受入れて呉れません、非常に苦しんで居りますが喜んで居ります、彼は次の如く言ひました。

「私は宗敎家の家で育てられ、宗敎を十年以上も研究しましたが何の信仰も力も得ませんでした、私が五日間キリスト信者の家庭の客となりて宗敎を見

ましたときに始めて信仰の力を悟りました』と。

キリスト信者の日々の生活の一擧一動は神の國の成敗に影響します、私共は患難にも喜びをなし、信者らしき生活をしたいと存じて居ます。

兎に角喜んで苦しむ悟りを諸君が得られん事を祈ります。

七、ビックリの論

今の世に最も不思議な事は『驚き』と言ふ事がなくなつて行くのを見る事であります。

一と昔、二た昔の近い昔に、膽を失ふ程我等日本人の驚き呆れた事も今は、

朝飯前の事になりました、飛行機が空で、ウナリ舞ひをしても、潜航艇が水の中に魚の眞似をしても、何とも思はぬ樣になつて了いました。近世になつて科學が進歩するにつれて、吾等の父等の時代から世界の人間は、新しい事、變つた事で驚かされて計り居ましたので驚かされる事が慣習になりまして、もう如斯き世には、ビックリするものは時代遲れで、ビックリしてもビックリせなかつた樣な虛言をつかねば世渡りが出來ぬと考へるものが多くなりました、しかし人は顏だけ口だけで虛言をつく事が出來ません、必ず化の皮が顯れます、それで、ビックリしても耻でないから天眞爛漫に世渡する質朴さを修養すると同時に又餘り時代遲れで新らしい事に尻もち搗いて驚かない修養が肝心であります。

『あの人もとう〳〵耶蘇教に入つたか』とビックリする人等は實に遲れた人

であります。

基督教はもう既に日本帝國に於ける大勢力であります、新聞紙に雜誌に又は思潮に健全なる思想が顯れます時、よく考へて見ると皆大概主イエスの教の燒き直しやら又は聖書の言其儘の引用で滿ち〳〵てあります。

『あの人は耶蘇になつて堅い人になつたね』とか『耶蘇教は蟲がすかんけれど、教徒は感心だね』と不思議がるのは時代遲れで無智を顯すものであります。

我に來らんとする者は十字架を任れとイエスは其信者に要求せらるゝのであります、眞の信者は、命懸けで信仰して居るのですから別に少々人らしい行をしてもビックリする事はありますまい。

また天國は畑に藏れたる寶の如し人みいださば之を秘し喜び歸へり其所有を

盡く賣りて其畑を買ふなり、とは有名なイエスの譬へであります、基督によつて命の寶を得たのですから、すべての者を投出して神に捧げてもよろしいと眞の信者が腹を定めて世に處するのですから、少しも驚く事がないのであります。

西洋の譬に『馬鹿なことをしたなあ！』と言ふことと『自己は馬鹿だなあ！』とは同じことであると申します。

其意は過去のことを思出して馬鹿であつたなあと嘆息ばかりして居るのは今現に自己が馬鹿なことをして居る最中であると言ふことであります。

過去の失敗失策又は深い罪、人の知らぬ惡事を自分の胸に持つことは今日限り止めて吾曹はキリストによつて物に應じてビックリ失望する事の無い魂を得たいものであります。

キリストの教は望の教であります。

兎に角烈しい世の中となりました、昔しの迷信などで吾曹は馬鹿にされて居ることは出來ません、吾曹の生涯に慥かなる力となるべきものがありましたら直ちに何者をすてゝも取らねばなりません、パウロの語の『後に在ものを忘れ前に在るものを望まねば』なりません、昔囉にロトと言ふ人の妻は、良人と共に燒け行く住慣れし己の市より逃げ出でまして隣の町に走り行く途中に、神の命令に背むいて振返り見ました處が鹽の柱となつて了つたとの事が聖書中創世記十九章にあります、實に意味多い話であります。

これは一度吾曹が目を醒して過去の不眞面目の一生を切拔けて新らしい眞の人間としての生活に入りました時にまだ回顧して昔の罪を戀しく思ふ樣では鹽の柱となつた方がましであると言ふ教訓話であります。

それで現代に屬する道は確固不拔のキリストによる信仰と智慧を得て、今迄の一生を棄て全く新に生れ更ることであります。

爾等まづ神の國と其義とを求めよ然らば此等のものは皆爾等に加へらるべし、此等のものとは衣食住其他人間として必要なもの全部を意味します、此聖句を味ひたいものであります。

八、世界の大發見

キリスト教は世界の最大發見をしたのであります、それは、女と言ふ人類の半數を發見した事であります。

女を男以下のものとし、男の所有物とし玩弄物とする様になつたのは、よくない宗教が、女は罪深いものである、女は極樂に行けないとか、女子と小人輩など申して人間として男より劣等であると考へる様なことを堂々と説いたからであります、高野に女人禁制の札を立て、女を宗教の靈場より遠けたことはつい近頃まで東洋の君子國がやつて怪まなかつたのであります。

女も男も同じ人間であつて生理上に違ふ事がある許りで、神の前に何の異つたことがありましよう、一般に女は男より罪が深いと言ふ事が言へる筈がないのです。キリストは、男女を區別して教へを説いて居られません、キリストの復活を最初に知つたのは女でありました、また十字架の死を最後まで涙を以て見屆けたのも女達でありました、キリストは女は男よりも尊いとは申されませんでした、また男は女より偉いとも申されませんでした。

神の前には男も女も同等であります、それですから女の貞操を重んずる許りでなく男の貞操を重ずるのであります、或人は「男の貞操」と言ふ言葉が、キリスト教から出て來たと聞いてそれだけで在來の宗教を棄ててキリスト信者となりました、野蠻時代には強いもの、即ち動物として強いものが偉いのでありますから男は女より偉いのでした、現在アリフカの黑奴の女はキャリコ一ヤルの價で奴隷として轉々賣買されて居ります、キリスト教の道德は強いものが弱いものゝ爲めに犧牲になることです、そして世界を神の國とする爲には命を惜まぬことです、『爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役るゝ者となるべし』はイエスの御言であります世界に女尊男卑もあつてはなりません。

女の社會に占めて居る位地は其國の文明の程度を計る尺度であるといふた人があります。

賢母なくして大人物はありません、神の子たる自覺のない女は、よい家庭を作りません。

女の貞操を賣買するが如き總ての劣等な制度を全滅しなければ、國の品位がありません。

キリスト教は世界に於ける女子教育の先覺者を起しました、そして女と男と同樣同權で、神の子の位地にまで上げて來ました。

一夫一婦の制はキリスト教から初りまして社會の最も堅固なる根底を作りました、如斯くして、東洋などでは歴史あつて此方、男の專横なることになれて居まして女は、たゞハイ〳〵と屈して居ました所から理想もあり主義もあり眞に男子の友となり其力となることが出來る道をキリストの教が開いたのであります。

これは女の爲めによいことであるばかりではありません、男の爲めに非常に幸福なことであります。

女は主義もなく理想もなく、たゞ人形の樣なものでありましたならば男は實社會に立つて幸福なものでありますまい。

今の世に此男女問題を正當に解釋することが最も必要であると思ひます、また社會改良の根本的研究であります。

九、　受くるより與ふるは幸なり

「間違じやないかね、受るより與ふるは幸なりなんて、そんな事はないよ、

勿論人に金を惠んでやると一寸よい氣持になるがね、後から財布を出して見ると減つて居るからね、アンマリ良い氣持ちが仕ないじやないか、然し、思懸ぬ處から金の百圓も降つて來ると、確に大喜になるよ』。

動物は本來其生んとする慾から必然利己的となり、與ふるのは例外で受くるのが原則であるとする、そして人の身より我が身が大事、人が困難しても自分だけは樂をしようとするのである。

處へ「受くるより與へよ」と言ふ人があればキ印ではないか、馬鹿さ加減が解らぬ言葉であるとするであらう。

然し、深く考へると、大に悟る處がある、先づ、受くる人と與ふる人とを別々に考へると、受くる人は持たぬ人であつて所謂貧乏人である、そして此貧乏は物質上と精神的の持たぬ人を意味し、與ふる人とは持てる人、金持ち又は精

神的の學問、信仰、愛、希望等を持てる人である。

人に金でも與へてやる人は貰ふ人より社會的にも地位が上である、人に信仰を與へ愛を施す人は貰ふ方の人よりは幸福の人でなければならぬ。

『そう言ふとそうに違ひはないが、我々貧乏人は常に受くる方、受けたい方の側であつて、それでは「受くるより與ふるは幸也」とは金持の寢言ではないか』と、反問する方があるに違はないのである。

百萬長者が五圓十圓の金貨を救世軍の慈善鍋に投げ込んで悠々として立去る姿は氣持のよいものであるが、私共中流以下のものはそんな眞似は出來ぬのである。

社會は上流に屬するもの百人に二三人、中流は百人に十五六人、貧乏者は百人に八十餘人と言ふ割合であつて天下は人數から言へば貧乏人の天下である。

それで矢張り「受くるより與へよ」は即ち金持の世迷言としか受取れない樣に見ゆるのである。

キリストは大工の子であられ、貧乏人、罪人の友であらせられたのに何故そんな言を出し給ふたのであらう。

キリストは慥に天下の大衆に向ふて、『與へよ、與へよ』と叫ばれたのであつた、そうすると其眞の意義は何處にあるであらうか。

貧乏人は與ふることが出來ぬだらうか、私共は與ふると言ふ精神は裏長家に盛んであつて、門構には振はないものであることを知るのである、私の友人は貧乏であつて長屋住居をして居るが、壁一つ隣の細君は私の友人の子が死んだとき、自分の家の最上等の蒲團を持て來て子供の死體を横たへさせ、葬式に當りては最も深い同情を與へたのであつて、其友人の親類をして眞赤な顔にな

らしめたと言ふことである、之に類する話は澤山あると信じる、上流社會でこれ程美しい心のある人は幾人あらう。

眞の與へると言ふ意味は人の爲めに、自分の有つても無くてもよい樣な品物又は金を出す事では斷じてない、與へると言ふのは自分の必要品の内より、無くてならぬ者の内より、所謂犧牲を拂ふて、不自由を忍んで與へなければ、眞に與へたのではない。

故に金滿は與へることが出來難いのである、三井家が百萬圓、カーネギーが五千萬圓寄附したとて、眞の與ふると言ふ意より考へると、或は長者の萬燈は貧者の一燈以下であると評しなければならぬかも知れぬ、否確にそうである。

人は何を與ふる事が出來るか、生れ乍らの人は赤裸身である、人は本來無一物である、生れる時に然り、死する時に然りである、其無一物なる人が與ふる

事の出來る物は何であらふ、「生命」しか眞に與ふる物がないのである。

『人その友の爲めに己の命を捐るは此より大なる愛はなし』

人生の目的は何であらう。

キリストに依れば『其「生命」を與ふる爲』と答へねばならぬのである、此所を味つて貰ひたい。

佛敎の言葉に法施と財施と言ふ事がある、私は「施」しと言ふ事を分けて二つとするのは施しを殺す事であると思ふ。丁度信仰を他力と自力とに分けて信仰を殺すのと同じ事であると思ふ。

法施は即ち悟りを施し、精神的に相手方を生かせる事であり、財施は物質上の施しである、然し、人は靈のみでもなく肉のみでもない、故に人は施すのに施しを分割して法施財施とする必要はない、キリストは生命施を叫ばれ生命を

與へよと迫られたのである、故に眞の生命を打込んで世に與ふるには、或は精神的の力を與へ、或は物質的の力を與へ其與ふる事は相手方により應變すべきである。

考へが此所迄來ると、眞に與へると言ふ事には一つしか與ふる物がない事になる、即ち生命であつて、其他に何を與へても淺薄である、穢れて居る、廣告的慈善や僞善は決して生命を與へない、故に眞の意義にて與へて居ないのである。扨て、眞の、與へると言ふのは生命を施すことであると思へば、貧乏人でも矢張り金滿同樣に與ふる事が出來、且最も貴い者を與ふる事が出來るのである。生命を與ふる事は幸福であらうか。

生命を與ふのは大抵の人には嫌いである、命を捨てる事は叶はない、命だけは御免と來る、然し、それは卷頭に認めた如く、動物的であつて理想の人的で

はない、即ち人は動物より進化して、萬物の靈となり神に達せんとする道にあるのである、人となる爲めには動物的根性を捨てねばならぬ、動物界より離れる道は唯一つである、即ち生命を與ふると言ふ事であつて與へて後人らしき人となるのである、言を換て言へば、動物界より卒業する試驗は、生命を世の爲めに捨てる事によりて及第するのである。

人となるは幸である、故に與へる者は受くる者より幸となるのである。

眞の利己は利他と決して矛盾しない、悟つて見れば利己は即ち利他である。

『我ために生命を失ふ者は、これを得べし』である。

10、生か死か

死ぬと言ふ事を考へる程世の中に目出度い事はありますまい。

『元日や冥途の旅の一里塚』と詠じました僧一休は死と云ふ人生の最も眞面目な大問題を掲げて、あの華かな室町時代の醉ふた樣になつて居た日本國民に痛切な警告を與へました、其死の聲を出しましたのは時も時一月一日、處も處都大路でありました。

私は現代の我國民に此死の問題を提供したいのであります。

人は死すと云ふ事を考へる事が嫌ひであります。知らず〳〵の間に此大切な事を考へずにたゞ目前の事ばかりに追ひまくられて五十年六十年を過して了ひます、そして最後の數時數分間または、一日二日に、何の用意もなくして此大

問題を解決しようと、蹠きます、それですから正當な死の意義を發見する事が出來ずに人生は夢であつたと妙な苦しい悟りらしいもので自身を誤魔化す樣な悲慘な目に合ふのであります。

人生は事實であります、浮いた〳〵世の中に私共は生活して居るのではありません。

私共は死と言ふ事を眞面目に考へねばなりません、そしてさうする事が最も目出度い事であります。

キリスト敎の旗印は十字架であります、磔刑柱であります、血と死の印であります。

西洋では昔から、イエスを愛の權化として、其最も强く顯れた光は、十字架上のキリストが其敵が與へたすべての侮蔑、すべての嘲弄、すべての屈辱に對

して。『父よ彼等を赦し給へ、其爲す所を知らざるが故なり』と言はれた事を貴びます、そして十字の印は愛の印となりまして、遂に女の襟に黃金やダイヤの十字架が光つたりする樣になりました、歐洲の諸國は其國旗に十字架を附けて居るのが澤山あります。

赤十字の印は誰知らぬものもありますまい、これは慥かに十字架の意義の一面であります、しかし、吾曹は十字架が嚴肅な死の旗印である事を忘れてはなりません。

死人の像、しかも磔殺された恐しい、身慄のする樣なものが尊敬され、美化されたので實に不思議千萬のことであります。

死を思ふときは道樂者も道樂を止めて眞面目になります、高慢も鼻が折れます、理屈屋も空威張りが出來なくなります、怠けものも働き出します。

今日で最後の一日である、今生の思出に一大奮戰をしようとする、大勇猛心は死と言ふ事から起つて來るのであります。

昔、貝原益軒は、武士の道は死を心掛るにありと申しました、至言であります、金言であります、キリストの救とは、キリストが世の爲、人の爲めに其高潔無垢の身を磔刑にかけられてもかまはずに盡された如く死なれた如く、吾曹も死ぬ事であります。

キリストの敎に入る事は死ぬ事であります、死んだ經驗のないものはキリストの弟子ではありません、眞の信者ではありません。

世の中の、總ての野心、總ての樂しみから死んで、たゞ其身も靈も神に託し奉るときに眞のキリスト信者となる第一歩を運ぶのです。

そして堂の奥に達するには、其神に託して了つた身靈を一切神の御攝理の道

具として神に絶對服從を決行するのであります。

つまり、吾曹は現世に死んでキリストと共に生るのであります。

パウロが『爾曹キリスト・イエスの意を以て意とすべし』と其手紙の内に認めました處を實行するのでありまして、その結果死生を超脱して、神と共に在る生活に突入するのであります。

そして眞の人となり眞の意義に於て目出度い生涯を送る樣になるのであります『十字架をとりて我に從へ』とのイエスの言を一言に申しますと、『我と共に死ね』との命令であります。

死と言ふ字に吾曹は新しい意味を發見して生命に移りたいものであります。

一一、神か金か

金が欲しい、巨萬の富があつたなら世の中は樂しい事であらう、何でも錢儲けをして時めかねばならぬ、目的の爲めには手段は選ばぬ、非道の事でも人に知れずにやつて居れば構ふものか、大にやるべしと骨を粉にし血の汗を滴らして日を送つて居る者は至る處に滿ちて居る。

四百四病以上の難病也と貧乏を苦にして不平不滿の輩もある縊死するものもある。

貧すれば鈍する也と悟つて向上の路を歩む心を失ふものもある。

兎角、浮世は金が光る、黄金が佛であると、黄金萬能主義の信者が多い。

『金の切れ目が縁の切れ目』『金が言はする旦那樣』と諺にある通り、此の世は金ばかりでは渡れぬ處である事を萬人は薄々承知して居るが、矢張り、たゞ金、金と憧がれて行き、金が得られなかつたならば大概の人は失望落膽氣が抜けた人か或は獨り善がりのすねものとなつて了ふ。人生は先づ、黄金と言ふものと善との關係を最も明白に承知して置く大必要がある。

現代は昔ではない、人口は鼠算で增殖するが、土地から得る食物は、其割合に收穫が增加しない、是は昨日より今日、今日より明日と生活が困難になつて行く事を最も痛切に敎ふるのである。

社會に秩序がつき敎育が普及されると昔の如くに一握千萬金を得る事が出來ない、風雲に乘じて巨萬の富を得る機會が減少して行くのである。

蓄積された富力は更に發展するかも知れないが、赤手空拳では何事をなす事も餘程六ケ敷い、そして吾曹平民の大部分は富者でないのである、それでも現代に於て富まなければ生き甲斐がないと信ずる人は非常に不幸の人であり且危險人物であると思ふ。

たゞ金を儲けて溜めよう、貯へよう、金を與へよ、然らずば死を與へよと叫ぶ金の亡者は、金の餓鬼は、其目的とする黄金を手にすると同時に、哀れ金の鎖に手足を縛られた金庫の番人、物質世界の奴隷となつて浮ばれない闇の人となつて了ふのである。

子孫の爲めに美田を買ふて、其可愛がつた子や孫が其富と寶の爲めに腐敗し墮落して了ふ事が度々ある。

金はダイナマイトの樣なものである、之をよく用ふると、人力で如何にもする

る事の出來ぬ巖石を粉破微塵とする事が出來るが、やり損ふ時はダイナマイトの使用者を爆聲と共に殺して了ふ。

金は使用法を知らぬ人に取りて、最も危險なるものである。

されば如何にすれば金を得ずとも幸福なる生活をなし、金を得たならば其使用法を充分悟る事が出來るだらふか、聖書の內から處々を選んで考へて見たい。

『富る者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し』とイエスは曰はれた、金の奴隷たるよりは、淸貧にして自由の天地に生活する方が、人間として何程の價ひある事であるか解らない。

人生に於る眞の樂みは金で買ふ事が出來ぬ。

『睦じうして一塊の乾けるパンあるは、あらそひありて宰れる畜の盈たる家に愈る』『家貧して孝子出づ』仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫

柔、撙節等の美しい果は金で買ふ事が出來ぬのである。

人生の目的は、天國を地上に吾曹が神と共に働きて建設するにあり、此爲めに、何をも犧牲にして顧みないとする生活は、金の奴隷となる事が出來ぬ生活である、此目的を有する者はキリストに屬する者である、聖書に『夫キリストに屬する者は肉と其情および欲とを十字架に釘けたり』吾等は金を得ん爲めに働くのでなく金を得て神の爲めに使用せんとして日々に額に汗するのでなければならぬ。

『命あつての物種』と昔の人が言ふて居るが實に人生に大切なものは健康と云ふものである、其健康も金で買へないものである。健康を維持するのは營養物や醫者や藥と云ふ金で買へるものでない、食慾、怠惰慾、色慾等の慾に打勝つ克己心即ち靈の力によるのである。

病人も精神療法によりて癒さるることが多い、必ず全快すべしと信じ切つた人は滅多に死なぬ人である、神を信じて、自己は必ず此世に盡す使命がある、自分を死なしめ給ふは、神の御損也とまで深い確信がある人は瀕死の床中にも希望を有して居る、そして希望の輝く處には死の陰が遠かるのである、イエスが病人を癒し給ふて曰はれた言に『爾の信なんぢを救へり』とあるは何たる福音であらふ。富者ばかりが病より癒さるゝのではない、否富者の信仰なきものよりも、貧しき者の信仰ある人が、より多く現世に於て癒され健康者であるのである。

『食過して死するものは多し、然れども餓死するものは少し』と誰かゝ言ふた。

金の爲めに精神的に葬らるるもの多しと吾曹は叫びたいのである、警告した

いのである。

キリストは貧乏であつた、一介の大工であらせられた、羅馬の帝王は世界の絶對專制君主であつて無上の富者であつた、キリストは今に活き給ひ、羅馬代代の帝は肉の亡ぶると同時に滅し去つた。

『貧者は幸也神の國は爾曹の所有なれば也、爾曹富る者は禍なる哉すでに安樂を受れば也、飽る者は禍なる哉、餓んとすれば也』(路加傳六章)

富者は必ずしも福でなく貧者は必ずしも苦痛を受くるものではない、ただ人の心の狀態によつて福ともなれば苦にもなるのである。

神の國を地上に建つる爲に奮鬪する富者は幸である、神の國を地上に建つる爲に活動して止まぬ貧者は幸である。

黃金の束縛を離れて神に來るは、キリストの敎を信ぜねば出來ない相談であ

る。

一三、己の罪か人の罪か

他人の罪を責むることを痛快なりとするのは人情である、大久保彥左衛門は、自分の一番好むことは、炬燵にあたりて空豆を嚙りつゝ、友達と人の惡口を言ふことであると言つたさうだ。

政治演說の檜舞臺も井戸端會議の雄なるものでも、人の惡口と裏面をあばく事が最も人氣を引く題目であるのだ。

世の中に人の惡所缺點を針小棒大にして大に喜びながら、己の身、己の內心

を省みずして憶面もなく大手を振つて活歩する大なる矛盾を敢てする人が多い、之は非常な愚なことであると言ねばならぬ、吃度自分が人の穴探しをする如くに、人も自分の揚足を取つて居る事は間違がない。

人は眞に自を省るときには、人を罰する心を起す前に自己の良心に責めらるゝ筈であるのだ。

或女が大罪を犯し、捕へられてイエスキリストの面前に引据られた、其女を捕へた人々イエスを圍みて死刑に處すべきか否かを尋ねたときイエスは爾等のうち罪なき者まづ彼を石にて擊べしと曰はれて身を屈め、地上に指にて畫きつゝあり給ふた。女を訴へたる人々其良心に責られ老者をはじめ、少者まで去り行つて跡像もなくなつて了つた、と聖書にある。

聖書に『義人なし、一人もなし』とある通り、世界廣しと雖も、内心に一點の曇りのない人は無いのである、若し玆に生れてより自分の心の中で罪な事を考へ、また道德上、法律上罪を犯したことがないと言ふ人があるならば、其人は良心の曇つた人であり甚だ氣の毒な人であるのだ。

罪とは惡いと知りつゝ之をなし、善いと知りつゝ、之を爲さぬことである。

法律の網に罹らぬから、罪人でないと言ふ人があれば誠に世間知らずの甚しいものと言はねばなるまい。

倫敦のワインと言ふ殺人犯の男は、米國に逃げて二十年の月日を無事に暮すことが出來たが或時本國に歸つて來て町の眞中で、大勢の巡査が一人の賊を捕へようとするのを見て、急に良心が己れを責め遂に自首したと言ふ事がある。

何故夜中に盜賊は、巡査を見て驚き走り、遂に捕へられる破目になるのだら

う、良心が責めるので泰然として道行くことが出來ぬからである、法網に罹る以前に良心の網の目に捕へられて居るから、怪しい奴と目星を指されるのである。

本來人は罪を犯す事を喜ぶものではない、良心の呵責があることを思へば。

然し、人は罪を犯すものである。

英語の sin 罪とは、的を外すと言ふ意義である、弓に矢を番へて引絞り、兵と的に向つて射たとき、的に當らず下に又は横に、矢がそれたときの意である、則ち、罪とは人として世に生れて、人生の目的を外れた生活をする事である。

此意義から考へるときに、人として萬物の靈長として恥しい行をするものは罪を犯した者である、人生の目的を有せないのも、亦的なしで矢を放つた阿呆と言はれ、罪人と呼ばれても、仕方はあるまい。

世の中に、的なしに唯其日其日の爲めに、ウロ〳〵と確心のない甚だ近眼的な世渡りをする人が多いのを殘念に思ふ、愚の至りではないか。

罪の結果は罰である、罪の價は死也とパウロは喝破した、嗚呼、私共は罪を犯したくない、そして罪を犯すことは最も愚なことであると知つて居ながら尙自己の欲の爲に、身を過つことは毎日の經驗である。

罪は恐ろしいもので、犯したときすぐに罰を受けるならば人は早く氣が附くのだけれども、實に罰の來るのは瞬時、其時に顯れないで、極めて徐々に然も毎日毎時其害を及ぼして來ることは、丁度雨だれの水が、石に穴を開けるが如き樣である、雨だれの下の石は呪はれたる石である。

罪を犯す人は呪れたる人である、ぽつ〳〵と來るけれども、必ず罰を受け決して間違がないのである。

罪の結果は現世だけでない、未來に及ぶのである、自己の靈魂の問題ばかりでない、子孫にまで及ぶのである『親の罰が子に報ひ』られるのである。

何も考へずに、其日のことばかりに全身全靈を取られて居るときは、自分は大した罪人でないと思つて居る、普通一般人間とは、こんなものだと早合點して居る、凡夫だ〳〵と悟つた樣に思ふて居るが、少し、書を讀むか又は、高い人格に接するか、或は世の中の波にもまれて、人とは畢竟何だらうと、考へて來ると、世界が一變するのである。病に罹るか、老年となつて死の黑い手の自己を捕へに來るのが急也と思ふとき今迄の考が一變するのである、煩悶に煩悶を起し、良心が醒め來つて己を責むるに至るのである。

『噫我困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや』と血を吐く如き聲を出すのはパウロ計りではない、自分は罪人の頭也、精神上到底死罪は免れ

ないと迄煩悶の極に達するのである。

此苦しみを經て後『窮すれば通ず』と古人は言ひ、哀む者は福也其人は安慰を得べければ也とイエスの曰ひし語が遂に眞理となるのである。

死の刻印を額に燒付られて、滅亡の火に投せられんとする罪人は絶望の極である、其絶望の極に於て、救ひ主ありて其罪を赦し給ふことが眞實なれば、彼は必ず救主に來るに相違はない。

玆に神の遣し給へる神の愛の化身イエス・キリストがある、そして、人を救ふが爲に己を犧牲として働き給ひ、「我に來れ我爾等を息ません」と兩手を擴げて招き給ふ。

彼を信ずる者に亡ること無して永生を受しめんとて、神は其人類を愛する愛を顯し給ふことを信ずることの出來る人は、罪より潔められ、今迄の罪を赦

され、新しく生れ更りたる人となることが出來るのである、死ぬ樣な苦しみを味ひつゝある人が此福音を聞いたときに、丁度不治の病に罹りたる人が世界中を探して名藥を得ようとする如く、熱心に命懸けで、其救主に來つて其命せらるゝ儘に總ての行をなし、精神を整へる筈である、饑渴く如くに其敎を研究し、實行する筈である。

そして、イエスに來る者は必ず其死の罪を赦されたと、確に良心に銘ずる事が出來るのである。再生の人となることが出來るのだ、學が進む程己の無學を知り德が進む程其身の罪深いのを悟ることが出來る。

私共も、キリストに來りて其良心を磨けば磨く程己の罪の多いことを悟り、神の惠みと、キリストの愛に賴りて其洪大なる罪を赦された事を確信し一切萬事感謝と喜びと、人を神に導く事の爲に全身全靈を捧げる樣になるのである。

そして、人の爲世の爲に一生を捧ぐることが人生の最大目的であり、眞の生甲斐ある仕事であることを悟るのである。

眞の人生とは、現世に神の支配し給ふ理想の天國を我等銘々の生命によりて實現せんとする努力を言ふのである。

宗敎とは、此目的を成就せしむる、力を言ふのである。

一三、祈る心

自然界には自然の法則と云ふものがあつて、水は低きに流れ、石は水に浮ばぬ世の中に、人間が神に祈つたとて、それで其祈りの爲めに、願が叶つたりす

るものか。叶ふものなれば、祈らずとも叶ふものである。人は唯神に頼らず獨立獨歩努力して一生を送るべきである。

天は自ら助くる者を助く、だ。

心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神は守るのである。と云ふ議論は度度聞かされるのであります、そして其様に申す人は如何にも尤もな理窟を云ふ人であると合點する人が澤山ありますと見えて、我日本の現代の人は宗教と無關係に暮して居ることを誇りとする様な物識りの多い事となりました。

佛國の宗教學者サバチエーは『人は祈る動物である』と申しました。又ブラグマチズムの主唱者ゼームス教授は『我等の祈ると云ふ理由は外ではない、それは我等人間は祈らずに居られぬものだから』と申しました。

或る神社で祈の事を調べた人によると、家内安全、一身安全、海上安全、

商賣繁昌、志願成就、病氣全快、厄難除け、お禮參り、と云ふ順番で、一年に九千八百六十件の祈り札がありました、其内家内安全と云ふのが七千百〇九件ありましたと。豐太閤も死ぬ眞際に人生は夢であつたと涙を落したとやら。人生は此の世の生活に大成功して、神なくとも何のその、と云ふ勢で暮して居たものも、死ぬ時になると急に心細くなつて、未來の事を考へ、神に祈りたくなるのが千人に千人迄のやることであります。

佛教は無神論であるべき宗教でありますが、それでも佛教に祈禱をやつて居ます。儒教は神を敬して遠ける考がありますが、今日其教祖孔子様は幾百萬の人の祈りの目的となつて了いました。人は人以上のものに祈らずに居られませんから、祈りを止める様に説いた教でも、其信者を祈りから禁止することが出來ないのです。

祈ると云ふことは天然自然の情であります、「祈りの歴史は宗教の歴史也」と申した學者があります、馬鹿らしい祈をする者の信仰する宗教は下劣なものであります。女郎屋の繁昌を祈つたり、丑の時參りの恐ろしい呪詛の祈りを聞かれるものと思ふたり、狐や鼠をお使とすると云ふ話のある正體の知れぬ神か佛か解らぬ樣なものに祈りをして、お賽錢の麥飯で鯛を釣る、算盤勘定の願を叶へて被下るものだと信仰して居る人の宗教？迷信？は實に原始人代の人類の幼稚な頭にあつたものを大正の御代まで持越して來たのに過ぎぬのであります。

天地は自分一人の都合ばかり願ふたとて叶へられるものでない事は明白であります。

キリストは宇宙萬物の造り主なる神、我等の魂の父なる神は一位である、其眞の神に祈りをせねばならぬと申されました。

祈りとは我等の願をするばかりではありません、神樣と交ると云ふ大切なものが肝心です。人は交る友によつて化せらるゝのです。そうですと、神と眞に交る者は神の如くなるのです、又祈りは神の命令を聞く事であります。

如何にして神に交り、神の聲を聞き、神に願をかけて、立派な人間となることが出來るかと申しますと、それは神の事が書いてある、世界中の人が寶として居る聖書を讀み、其内に書いてあるよい事を合點すると同時に實行すること

であります。

聖書は人の寶でありますから、價貴いものであらふと想像し、六ケ敷い本であらふと思ふ人もあるかも知れませぬが、世には人の爲めに汗膏で儲けた金を投げ出す有德の人がありまして、施本的の販賣をする會社がありますから聖書は金十錢で誰れでも買ふことが出來るのです。

そして振假名付ですからよく讀むことが出來るのです、勿論解り難い處もありますけれども、眞に解り易い大事の場所が澤山あるのです、齒に合ふ解り易い所から讀み且實行しますと、新天新地開けて神に交ることが出來るのです、結構なことではありませんか、それから祈つたとて駄目だと申す人があります、それは一を聞いて十を知らない否聞かない人であります。

水は上に流れません、けれども水道のある市では水は上に流れて居ます、石は水に浮びません、けれども石より重い鐵の船は幾萬噸も荷を乘せて海に走つて居るではありませんか。

自然の法則は變ることが出來ませんけれど、法則は他の幾多法則によつて支配されて居ります。人は自然の法則の「いろは」を知りまして、科學萬能だなんて向ふ見ずの議論をしますけれど、此宇宙はまだ人に知られぬ法則は幾萬あ

るか解りません。

引力の法則で重い者は地に落ちるに定まつて居ますが、鳥が空を飛び廻つて、昔から引力の法則を破つて居ります、近世の人は飛行機を作つて引力の法則を他の幾多の法則で支配しました。

神は人以上の人格であります、魂であります、それですから人の奇蹟だと言ふことを決して法則を破らずに支配して行ひ給ふことが出來るのです、人の祈りは不思議でも神の御心に叶ひますと、學者が如何程疑ひましても否定しましても叶へられ實現されるのです。

祈る甲斐あらんあらじは知らねども
世に神ならで誰に頼らん

と香川景樹は詠ひました、景樹は祈り甲斐なしとも祈る氣になつて居たので

す、私共は祈る甲斐あるを知つたのですから、祈りの人とならずは止まぬのであります、祈れぬ人は不可思議、非常の變物であります、精神的に不具者であります。

詩人は申しました

「愚なるものは心のうちに神なしといへり、かれらは腐れたり、かれらは憎むべき事をなせり」

「あゝ神よ、鹿の谿水をしたひ喘ぐが如くわが靈魂もなんぢをしたいあへぐなり、わが靈魂は渴ける如くに神をしたふ、活ける神をぞしたふ」

人は神を知らずして世を樂觀することが出來ません。

絶へず神と交りたいものだと思ひます。

一四、宇宙の人

地球より太陽迄の旅行は一時間四十哩の速力を以てして二百六十五年を要し、海王星より太陽迄に七千九百三十八年を要すと言ふ事だ。

宇宙は宏大なること無邊である、今學者の知つて居る太陽系以外の最も遠い星より來る光線は、一秒間十八萬六千哩の速力を以てしても、猶驚く勿れ二萬五千年の時間の旅を續けて初めて地球に達すると言ふことである。

六尺の男子を雲突く計りの大男と我等は言ふて居るではないか、雲を高しとして昔の人は雲の上を天國と思ふて居たが、普通の飛行機でも數分にして一萬

尺の空に達することが出來るのだ。

日本人は矮軀六尺に達するものは少ない、衣冠に至り袖腕に至る丈夫と叫んで見ても宇宙に對する時人は何だ、塵と同じ者ではないか、五十歩百歩の差ではあるまいか。

一粒の桃の種は地に落ちて萠出でたならば人の命よりも現世に於て長命だ、鎌倉時代の銀杏の樹は八幡宮社前にある今の銀杏だ、そして一代の征夷大將軍源實朝朝臣は今何處にある、苔むす墓の下の土でなくて何である。

『われらが年をふる日は七十歳にすぎず或は壯かにして八十歳にいたらん、其誇るところは唯勤勞と悲しみとのみ、其の去りゆくこと速かにしてわれらも又飛去れり』三千年前の詩聖ダビデ王は喝破して居る、信長は人生五十年の思想を以て諸士を死地に乘入れしめたではないか、嗚呼人とは何であるか、萬物

の靈とは畢竟學者の寢語であるか。

眼を轉じて微妙の世界を見よ。

鱈はあの少さい腹に六百萬の子鱈となるべき卵を孕むことが出來る、芥種は最も少粒の種子であつても樹となり花を開き實を結ぶことが出來るのだ、科學者の知る電子の大さに至つては一分の何億分の一しかない微細なものである、そして絶ず活動して居る。

肺結核菌は一千倍にして幅一厘長さ約一分の大きさしかない恐ろしく少さいものだ、そして殺人罪を犯すことが出來るのだ。

宇宙は無限に大にして無限の小に達するものである、此大宇宙に生活する吾人は西郷南洲の所謂『人を相手にせず天を相手として』一生を送らねば人生の意味がないのである。

一世を蓋ふ名將となるも、世界の第一富豪となるもそれが宇宙に對する時は何である、人の榮は花の如く朝露と共に消えて行く悲劇を吾等は毎日新聞紙で見て居るではないか。

運、不運は神の定め給ふ人の試驗である、金を與へる時は弱き人間は必ず狂亂して禽獸の心を發揮するのである、成金の放蕩は其の代表である、宇宙の造り主なる神は金を與へて人の價値を試驗し給ふのである、富たりとも人間として成功せなければ人生の大失敗であるのだ、此大宇宙にありて生命を受けたる吾等の成功とは何であるか。

田舍の草深き人里遠き荒家の主人主婦であつても、人たる道、キリストの所謂神の子の生活をしたならば其人の宇宙に於る位置はナポレオン以上である、シーザー以上である。

萬物の造り主なる神は無限の小さきものも無限の大なるものも同じ注意を以つて作り給ひし事を信ずる時は、如何なる小さい行も人として成功したる行ならば、誠心を以て冷かなる水一杯を渴きたる人に與ふるとも、其効は世に名を賣らんとて幾千人の餓死せんとする人を救ふ政治家の功名心に優ること天地の差があると言はねばならぬ。吾人の生活は小さい事件の連續である、大事件は割合に丁重に考へ良心の働きが鋭いから人として解決をつけることが可能だ、然し小事件は心を用ひない爲に常に我儘を張り通さんとするのが人情である、人生は大事件ばかり起らない、埋れたる人は一生の内大事件に一回も遭遇しない事がある、小事件は人間を作る試金石である、小事に忠なるものは大事に忠也、吾人は宇宙の人として、宇宙の神を相手にして小さいことにも人道を忘れぬ生活をせねば塵の一肉團として生活するのと變りがない。

人たらんか、一肉塊たらんか、人生は其試驗場であることを悟らねば、頭腦があつても無きが如きものだ。

一五、　信仰論

信仰せよ、信仰せよと言はれると何だか抹香臭い、解らないことを強いられる様に私共は感じたものだ。

然し、信仰した後に考へて見ると、よくもあんな不安な狀態に長い間暮して居たものだとあきれる。

信仰とは信ずる事である、信用することである。考へて見ると、汗水になつ

て土の中に雨風を物ともせず突立つて、田植をして居る百姓は、信仰があるから働くことが出來るのだ、秋になると植付けた苗が、房々した穂を重そうに戴いた、立派な稻となつて、苅入の悦を與へて呉れるものと信仰するから、それで、雨の日も炎熱の日も我身を忘れて働くのだ。

我等が今夜安樂に寢る事の出來るのも、此天地を信用信仰するから枕を高くすることも出來れば、鼾聲をまで擧げて太平樂であるのだ、即ち明日も亦今日と同じ様な日が來ることゝ信じて居るからである、深く思ふときは世の中百般のもの皆信用ずくで出來て居ないものはないのである。

錢入に入れた五圓の金は五枚の紙ではないか、日本銀行を信用するから五圓の價のものを賣つて呉れるのだ。

飯を食ふにも毒の入つて居ないと信ずるから、大口開いてパクつくのでない

か、人の爲すことは一から十まで信用ずくである。

然し、更に深く考へて見ると、前記の百姓は何を信用して働いて居るのだらう。此天地を信ずるのであらうか、或は天地の法則であらうか、運命であらうか。

私はそんな雲をつかむ樣な考へに信仰を起すのは淺薄であり頭ある人では出來ないと思ふ。

天地に誰が主宰者であるか、誰が其造主であるか、造られたる此天地が、造りたる者なくして實在することは出來ない。キリストは、宇宙の造り主なる眞の神、唯一の神を信ぜよと曰はれた、そして其神は人間に取つては天の父であると信ぜよと說かれた。

此神を信じて後總ての事に考へを及す時に、何もかも解決が着いて悟りに入

るのである、生れ更りたる人となることが出來るのである。

是迄、日本で神樣だとして居たものが、あまりに、人を馬鹿にしたものだから、其正體を見屆る程の學問智慧が進んで來た大正の人は、人造の神々を殺して了つたのだ。

神を殺すとは極端な言ひ分だが、私共の先祖の信じて居たつまらない紙片を拜むことや、お社の中の下手な彫刻に三拜九拜は、今の人には出來ぬ樣になつて來たので、人が神棚と言へば鼠の遊び場、塵芥の問屋の樣に思ふ樣になつたのは、つまり紙片の神（其名は何と書いてあらう共）や人の手でなつた彫刻や鏡の神樣を殺したのだ。

然し、キリストの敎へ給ひし神は眞の神であつて、人造の神ではない迷信の相手ではないのである。

世界の哲學者でも科學者でも六ケ敷い學問をして後宇宙の實在だとか、宇宙の絶對だとか、神學者の所謂全智全能にして在さゞる處なき神、宇宙の支配者等と言ふのは、此神を意味するのである。

人間の身體は、眼に見えぬ魂の爲に自由自在に活動する如く、此天地も眼に見えぬ神の靈によつて動いて居るのである。

日月星辰と、昔の人が言ふた天體が整然として動くのは、神の靈が動かし給ふからだ。

此世界唯一の神――宇宙唯一の――神が愛の神、天の父であると信ずることが、キリスト敎の出發點である。

議論もある理屈もある、けれど詰りは信仰すればよいのである、子が親を信ずる如くに、たゞそう信用するのである、そして萬事を此信仰の土臺により割

出して行くと、遂に止むに止まれぬ悟りの人となり、宇宙の志士となり、愛國者となり、孝行な息子娘となり、敎育勅語を實際に實行する忠實な人となることが出來、また人生を眞に有益に送る人となる事が出來るのだ。

神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき者なり。

心の清き者は福也其人は飽く事を得べければ也

理屈つぽい頭の人は、生れ更らねばならぬ、疑ひ深い人は、信ずる人と生れ更らねばならぬ、(疑ひ深い人とは私共が淺い考へから言ふので、前に記した如く、決して萬物を信ぜずに卽ち神を信ぜずに人は生きて居ることは出來ないのだ)。

罪の爲良心を失つた人は生れ更ればよいのである。

どうせ、信ぜずば生きて居ることの出來ぬ人間なのだから、神を信じて大に

生る覺悟が大事である。

神を信じ、亦われ（キリスト）を信ずべし。

我は途なり眞なり。生命なり。（ヨハネ傳第十四章）

新渡戸博士曰く

神のあるなしも學理や議論では盡くせぬ、神を理解するには人の心の誠以外にない。

明治天皇御製

目に見えぬ神の心に通ふこそ
人のこゝろの誠なりけれ

一六、人としての責任

はたらけどはたらけど、猶わが生活
楽にならざり、ぢつと手を見る

とある如く、現代の生活は苦心慘憺の戰ひである、空手では到底昔の立志譚の如き成功は出來ない。貧乏者は貧乏を續け行く、そして金持は愈々大富豪となりつつある。米國のハンター博士は曰く

今全英國の人口は百人で其全財産が百圓とすると、一人宛平均すれば一人に一圓の財産となるが、今の狀態では百人の内二人が百圓の内金七十圓を所有し、殘りの九十八人は金三十圓の財産を分け合つて居るのである、恐ろしい割合ではないか。大英帝國の全人口の二分は全財産の七割を握つて居るのであ

る。又同じ少數の人は佛國には六割を米國では五割九分を持つて居る。我國では如何？

暴富を致し、社會の大衆の利益を一身に聚めたとするならば、富者は貧民の社會の缺點に責任を持つて居る、貧乏人は怠惰者だから酒をのむから頭がよくないからと其人等を責むる事は出來まい。

鷄屋の家に片輪が生れたのは、殺生をする鷄屋の主人夫婦の責任か、否！鷄肉を買つて殺生を商賣にさす社會の人と、舊い宗教の迷信を以て一切の生物を殺し食ふ勿れと言ふ、長袖連中が鷄屋の女將を慄へしめて、胎内の嬰兒を心理的、生理的の片輪にした者の責任でなければならぬ。

今日の生活費の暴騰は、カイザル一味の獨逸人が責任を受けねばならぬ。今の社會の腐敗は、教育家宗教家等が眞面目に盡して居ないからである。或

人は言ふた、桂公は大政治家であつても哲學がなく、夏目漱石氏は大文豪であつて尙宗教がない、日本はまだ〳〵眞面目な文明國民ではないと。私共は此世に對して大責任を感ずる位でなければならぬ。

私は責任と云ふ事を考へると、私も此社會の腐敗に對して之を改め、更によい社會を造る爲に力を盡して居ないから、此腐敗の責任がある者であると悟るのである。

昔獨逸に、ヨーク婆と呼れた酒飲があつた、そして百八十年位前に六十歳で世を去つた、處がヨーク婆ののんだくれの血は次の表の通りの禍を獨逸に遺したのである。

ヨーク婆の血統より生れたる子孫の總數八百三十四人、學者が其子孫の銘々を突留めて取調べたる總數七百九人、此七百九人の内には左の通りの肩書付

がある。

醜業婦一八一人、乞食一四二人、私生兒一〇九人、懲役囚人六九人、殺人犯人七人、養老院にて政府に養はれたるもの六四人、肩書付總數五六三人。

一人の惡しき血統は二百年を待たずして社會の毒となりたるもの五百六十三人であると聞けば驚かぬ人はあるまい。

私共は今は一個の人間である、我は一人である。然し、二百年後に我血統を受る者は千人に近い人數になるのである。思へ、考へ給へ諸君、私の一生は後世の社會に大責任がある。私の流す血統が毒なれば世を毒すること前例の通りである。親の罪は子に報ふのである、然し若し私の血が世を益するものなれば、社會を益する事以前のお話と反對である、嗚呼、沈思すべきは此問題で

なからうか、横に我一生は全世界と連り、縱に我一命は後世に連る、考ふれば今送りつゝある、我が月日は大責任を肩に負ひたるものである、人の一生は重荷を負て遠き道を行くが如し、とは家康のみの感想ではない、此大責任を眞に熟思して我は此社會を善き美しき世とする爲めに、人となり、先覺者とならねばならぬのである。

然し、人となる程困難な事はない、まして先覺者なぞに如何にしてなれよう、理想はある、然し實行しようとすると何一つ思ふ樣に行かない。

嗚呼、如何にせん、此腑甲斐のない善を行ふことの出來ない心を如何にしようう、私は意志の弱い罪の多いものであると嘆かねばならない、之は萬人の胸中に來る經驗である、そして此私は罪人也と思ひ、時には、生れなかつた方が幸ひであつたのでなからうかと思ふのである。

然し此哀の極りに宗教に入る門があるのである。謙遜なる者、心の貧しきもの、餓渇く如く義を慕ふものでなければ宗教の奥義を握ることは出來ない。

パウロは言ふた

わが行ふ所の者は我も之れを是とせず、我願ふ所の者我これを行さず我惡む所のもの我これを行せばなり。

噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや

是れわれらが主イエス・キリストなるが故に神に感謝す

罪人の救ひはキリストにあるのみである、我等は罪人である、故にキリストに救はれんことを希ふのである。

一七、醒めよ

蚤が飛ぶと、普通の人は厄介なもので捕へるのに困ると思ふだけであるかも知れない。けれども昆蟲學に醒めた人は考へる。若し蚤が飛ぶ力を以て馬が飛べば如何程飛べるだらうかと計算すれば、一飛にして東海の名山富士山を飛び越す事が出來る事になる。

人は考へると言ふ事に於て萬物の靈長である事は皆承知して居る。それだのに社會の人は何故考へつつ世渡りをせないのだらう。毎日々々起る事件で目前の事に醉つてしまつて、醉生夢死して居るからである。

醒めよ！醒めよ!!とは現代の大いなる叫びではなからうか。

小さい事でも考へて見れば大いなる趣味がある。諸君、水瓜や南瓜は畑で蔓

になつて地に這つて居る。椎の實、椋の實、櫻の實等は高く枝になつて居る。此れは天の攝理であると考へる事が出來る。若し水瓜が二丈もある木の上になつて、熟して木の下を通る人や馬の頭の上に落ちたとすれば大變だ、水瓜で頭が割れて死人が出來たと言ふ樣な重大なことが起るかも知れない。

天地の事を考へて見ると、如何にも巧みに出來て居る。

詩篇の記者は、天地に神なしと言ふ者は愚かなる者なりと言つた。

神があるとか無とか議論をするが、必竟神がないと言ふ人は悲しい人、失望の人であり、人生の目的が解らない人である。そして神があると言ふ人は喜びの人であり、得意の人であり、人生の目的を悟つた人である。

今の學問の力で、神が在ると證明することは出來ない。神があると言ふ人は、神があると信仰する人である。又學問の力で神がないと證明する事は出來

ない、神が無いと信仰する人があるだけである。

同じ信仰するなら樂しく一生を送り、人の爲になつて、生き甲斐のある生涯に入る神を信ずる人とならうではありませんか。

此世の生活の夢より、神に依つて醒まされたる者は幸ひなる人であるのだ。

イエス・キリストの一生を聖書を通じて讀む時に私共は心の内の光り明かになつて神に呼び醒さるる準備をする事が出來る。

心を靜めて、天地の神に對し、思ひを深め祈るときに、電光の如く宇宙の眞理を悟るときがあるのは確かである、此の經驗を獲ない人は其の熱心が足らないのである。

熱心と言へば歐洲大戰爭に於ける獨逸人の如きは例が少ない、彼等は命懸けを文字通りに實行して居る。

英國の海岸で戰爭中澤山の商船が獨逸の潛航艇の襲擊に遇つて沈められた事がある。其當時どうして潛航艇は商船の在所を探し出して、うまく水雷を發射するのであらうかと、英國政府は苦心して調べて見ると、獨探が只一人で毎晩海岸に自轉車を乘り廻して、其ランプで人知れず沖合に信號して居たと言ふ事である。

佛國で獨逸軍が攻めて來ると、佛軍の陣地の樣子や配置をよく知つて居る。飛行機の偵察ではあんな細い事が知れる筈がない。それで佛軍の方で調べて見ると陣地附近の町の洗濯屋が、屋根の物干に干物をして居て、其干物の色や大きさを配合して、敵軍に信號して居つた獨探を發見したのであつた。

此樣に獨逸の探偵は、祖國の爲に一人で死地に入つて、其任務を全ふし樣とする勇氣がある。

諸君、私共がキリスト敎を研究する時に、人が笑ふと、攻擊し樣と、或は肉體を亡そうとするも、尙熱心に人生の目的を探偵して、必ず神の眞理を握り我國民全體を益しやうと言ふ勇猛心を抱いたならば必ず靈界の先覺者となる事が出來る。

キリスト曰く

身を殺して魂を殺す事能はざる者を懼るる勿れ、唯なんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ。

一八、　災難と我等の行先

何故大地震や大火災や燒火や海嘯があるんです、あゝ人生は實に果敢ない暗い恐ろしい悲慘な事ばかりがあるんです、もう生きてることが馬鹿らしいから一と思ひに死んで了ふ事にしようと、折角恐ろしい死地を逃れた人が再び火の中に飛込んだり、汽車に敷かれて了ひました。

『東京全滅！横濱燒野原と化し鎌倉は最早地圖の上に存在しない。伊豆の大島も太平洋の底に沈沒した、富士山の大噴火、死傷數十萬』と言ふ海外電報は地球の八方、全世界に一大驚愕を與へました。事件の後十日もたつてよく調査をしますと間違も澤山ありましたが、震災地方に居たものは日本全國が無くなつたのでないかと胸を轟かせたのです、世界の歴史にこんな恐ろしい事は又と

ありませんでした。

この恐ろしい世の中に神も佛もあるものかと、皆我身や近親の不幸を嘆きつつ大混雜の中に命がけて乘込んだ避難列車の中で、行く先を考へては泣くに泣かれぬ苦しい想に身も魂も、瘠せて行くのをつくゞ〳〵無殘に思つて居られる方が多いでしよう。この數ページの印刷は、避難されて苦しいお心に沈んで居られる、愛する同胞のために少しでも人生の目的と、頼るべき我等の魂の親なる、たゞ壹柱の神様――人類の父なる神――イエス・キリストの傳へて下さつた神様の事をお知らせしたい爲めに、同情の心に滿ちて騒ぐ周圍の人の聲より逃れて机によつたものゝ筆の跡です。

私共も何もかも知りたいんです、地震が何故あるんです火事がどうして、あんなに恐ろしい火を出して人間を殺すのですと聞いても、世の中に誰も返事

の出來る人はありますまい、勿論學者はいろ〳〵地球上の現象について説明してくれます然し、何故あんなことがあるかは、誰れも知りませぬ、たゞ私共には、星もあり、太陽もあり、地球もあり私共も生きて居るし、地震もあるし、又花も咲くと言ふ事實のあることばかり知つて居ります、

人間は何千年の間、何故、何故といろ〳〵のことを知りたがりまして。何千億の人達が骨折りましたが解らぬことは決してまだ解りませぬ、自分の命が二十四時間の先迄必ず續くのだと言ふて見ても、朝あり夕あつて後でないと確かにさうだと證明が出來ませんし、一輪の朝顔だつて何故咲くのか、考へれば考へる程不思議な世の中です。

何故災難があるのかは解らぬとしても、私共の生きて居るのは何の爲めでしよう又危い處から、私だけ或は私等だけ逃れて來たのは何の爲めでしようかと

考へて來て下さるといよ〳〵私の申上げようとする處に近くなつて下さるのです。

＊　＊　＊　＊

人間はどうしても宗教的です、そして人間以上の力に頼るものです理屈だけで、神も佛もないと申ても、イザとなれば人間以上の神佛を頼るものです、世にいろ〳〵の神や佛の信仰があります寺もありますお社もあります、又教會堂なんかが出來て居ります。

私は最もよく解るそして本當の力となるのは私共の心の源である父なる神を壹と柱だと信じます。

心の親ですから目に見へませぬ、又人の手で作つたお宮やお堂に住み給ひません、靈界の存在です。

『神は靈なれば拜する者もまた靈と眞を以て拜すべき也』。（ヨハネ傳四章二四）

『心の清きものは幸也其人は神を見る事を得べければ也』（マタイ傳五章八）

とイエス・キリストは吾等に敎へて下さいました。

人は眞の神を求めました、木佛や金佛やいろ〳〵のお神體に人は滿足しませんでした、ついに神より、人を愛し給ふ大御心より、イエス・キリストが世に來り給ひまして天に存す唯一にして眞の神は、私共の父の心であり給ふこと、そして、神は愛であることを敎へて下さる計りでなく御自身が其神の愛の實行をされて人間の苦しみの中の絶頂である、眞實の罪による磔刑の痛々しい死に方をされましたが、其身、其魂は此世限りに非ず、永遠に神と共に生きて人間は此身體を失ふとも、必ず永遠に生きるものである事と吾等に證明されたのでした。

このキリストの敎による時は、私共の心は大安心を得ます、死するも生きるも神の命のまゝ喜び勇んで居ることの出來る宗敎の極意、堂奥に入ることも出來るのです。

必ず聖書を手にして下さい振假名付の聖書は二十錢であります、そして敎は誰れにも、信ずれば、直ちに讀まれた人の血となり肉となります。

私は熱烈におすゝめします、今の苦しみを變へて喜びとし人生の苦難を變へて人生の眞の目的とする愉快に入る途はイエス・キリストの體驗を本氣で信ずる事にある事と存じます。

『凡て勞れたる者また重きを負る者は我に來れ我爾等を息ません』（マタイ傳十一章二八）

『なんぢら心に憂ること勿れ神を信じ亦われを信ずべし』（ヨハネ傳十四章）

『主イエス・キリストを信せよ然ば爾及び爾の家族も救るべし』（使徒パウロ）
『人キリストに在る時は新に造られたる者なり舊きは去て、みな新らしく成なり』（使徒パウロ）

＊　＊　＊　＊

さて人生は信仰がなければ全く不可解です、然しキリストを信ずれば何もかもよく解ります、全部が解らなくとも、人生の目的を知り、力強く人の世に有益なものとなり乍ら天職を盡し、人道を歩み行くのに差支のないだけの悟りは開けます。

此の一文で何もかもお了解下さることは勿論六ケ敷いことです、たゞ私共は今や成金時代の夢破れ、不景氣のどん底に天災が來て日本國民の根本的改革の必要なることを痛感したのです、幾十億の富を一朝にして失つたのですが若

し物質のみに力を入れた私共が物質界を支配する精神界に悟を開き本當の眞人間として世に立つことの出來る事になるなれば『全世界よりも尊いと』、キリストの宣言された、私共の魂の永遠の存在を握ることが出來る計りでなく、我日本として世界の人の心に今迄の樣な殺人文明惡魔式生活狀態より眞實な純化された樂しい人類協存の文明の花を咲かせることに卒先せしひることが出來ます。

私共の生れて來たのは私共を通じて神の力が世に現れ少しでも世界を善にし眞にし、美しくする爲めであることを悟りませう。

いたづらに嘆きますまい、復活、復活、又復活、死地に入りて生命が、虎穴に入りて虎の子を得た人となりませう。

一九、　努力すべし艱難すべし

『人生は須く短命なるべし』長命を得んとして日々衛生のみに努力して見ても醉生夢死では年百を數へても短命であります、鶴は千年龜は萬年と新玉の壽として萬歳なぞが囃し立てますが、たゞ長いと云ふ事ばかりがよいことでもなく意味のある事ではありませぬ。

人生は何か意義のある役に立つ眞の人の目的を果す爲に實のある所謂內容充實したるものであつたならば、短命であつても長命であります。イエス・キリストは短命でありました、たゞ年三十三歳で磔殺さしたのが短命であつた許りで

はなく、其大宗教を打立てゝ神と人とを和合せしむる大抱負は、僅か三年足らずの大奮闘によりて實現せられ約二千年以後の今日に至つて地球上に十字架の旗の翻らぬ處なく其信徒數億を數へる樣になりました、社會的に言へばイエスは三年足らずの命でありました、實に主イエスは短命で長命せられました。

『人生は須く短命なるべし』面白い言であります。

眞の武士は死と云ふことを常に念頭に置きまして、今日は臨終の日であるかも知れぬから一日全力を盡して活動せん、今年は最後の年であるから死力を盡して君に忠を盡さんと日々一生懸命でありました、之は短命であることを豫期して長命になりつゝある生活の致方であります。

口頭で今の人は、すぐ一生懸命と云ふことを申します、『或人は一生懸命に笑つた』と云ふ珍句があります。之れは眞面目に一生懸命と云ふことを考へな

いからであります。

時間と言ふ事は人が勝手に定めた事で天地永遠の生命から申したならば千年萬年と言ふも一瞬時と餘り變りがありませぬ、我曹の庭先の石一つも數千年の日月にやつと出來上つたものであると、地質學者は申します。嗚呼人生八十九十、百の年を越えても何の意義がありましよう。

近江國蒲生郡は二四・一六方里の小郡でありますけれども、百歳以上の人が八人あります、其最年長者は今年百〇六歳の男であります、しかし此八人の人達は誰れも知りませぬ、唯郡役所の統計に出て居る計りであります。

イエス・キリストと十字架の旗は誰も彼れも知つて居ます、そして其人は二千年前の人で三十三歳の青年で殺され給ふた方であります。

三度書きます、『人生は須く短命なるべし』と。

『それ日出て熱し草を枯せば其の花落ち其美しさ容さゆ富める者も亦かくの如く其爲ところ半にして己まづ亡ん』之は聖書中の一句であります。

人生朝露の如し、早くキリストによりて其眞の目的を悟り、神と共に歩む人は幸であります。

努力すべし、艱難すべし、命を棄つべし、されど必ず人生の眞目的を得ん、と決心することが大切であります。

二〇、痛快

近頃、痛快と云ふ言がよく流行して居る。

痛快と云ふと僕は義俠と云ふ事を聯想せずに居られない、更に義俠と云ふと昔の江戸に、長刀を落し挿しに隨分これわと人の目を射る華やかな着物を着て、尺八でも腰に、町奴と名乗つて封建制度の武士の横暴に對する平民の味方をして、命を鴻毛の輕きに置き、義の爲、弱きを助け強きを挫く爲めに、赤い血と花を散らせたのが、彩色の強い畫となつて頭に顯れて來る。

僕は何だか、幡隨院の長兵衛、清水の治郎長、新門辰五郎なんかの話を讀むと、實に肉の躍々とするのを覺へる、つまり、痛快なる事實は僕に取りて何よりの好物なのである、と獨り合點して、常に友人なんかと話をすると、痛快だ！痛快じやないかと、口から此二字が出て來る。

聖書は頗る敬虔な書、聖の聖なる神の御言を承る書であつて、實に歷史上に高潔なる偉人として名を後世に垂れた大人物は多く此書の感化によつて、此

書を通じて、イエスを知り、神に達したのである、僕は勿論、非常に貴重な書物であり、其中に大思想あり、大文學ありと心得て居たが、讀んで日本の町奴の、其力强き旗本衆と、達引して、如何にも、平民の怨聲を機智と頓智で練り上た、惡口、罵言、敵の腹をゑぐらねば止まぬ概ある、甚だ痛快な語句を、此聖書に發見するとは思はなかつた。

處が、一日以賽亞書を讀み去り讀み來つて其四十四章に達した、其半ば頃、僕は吾知らず、例の痛快也と叫んで書を机上に落して獨り其書き綴られた事實を心に忍ばせて、悅に入つた、あまり嬉しかつたので諸君に紹介しようと筆を取つたのである。

今はバビロニアの天下である、時は我神武天皇大和の橿原に大日本帝國最初の帝王として卽位し給ひしより約七十年の後、メソポタミアもスリヤも切り從

る計りか、神の撰民也とカナンの地に祖先を倶にし風俗習慣を同ふして建國したイスラエル王國、ユダヤ王國も滅ぼし盡し實にバビロニアは全世界に君臨した。

バビロニアは最早當時人の棲てふ國は皆手に握つて了つた、吾れにバアール神あり、金もて作れる神像あり、木像あり、視よ、イスラエルの神の弱さを、と凱旋の聲につれて呼はつたのである、吾等は昔の人が如何に單純な頭を以つて居たかを知つてバビロニア人がバアル神に從ひたかを視なければならぬ。

此大國民の信仰する、バアル神に對する、預言者イザヤの怒りは句々肺腑を貫く罵言となり惡口となつて顯れたのである、イザヤは生粋のユダヤ人である、而して眞の神天地の造物主、アブラハム、イサク、ヤコブと祖先代々の偉人が從ひ奉りし神が、異國の偶像で人の手にて造れる神々に嘲弄せらるゝは堪へ

切れない。

『エホバ、イスラエルの王イスラエルを購ふ者、萬軍のエホバ如此言ひ給ふ、我は始也、我は終也、我の外神あること無し、偶像を作る者は皆空しく、彼等の慕ふ處のものは益なし、その證しをするものは、見ることなく知る事なし、斯るが故に恥を受くべし、誰か神を作り又益なき偶像を鑄たりしや、鐵匠は斧をつくるに炭の火をもてこれをやき鎚もてこれを鍛へ、强き腕もて是を打ち固む、飢れば力をとろへ水を飲まざれば、つかれ果つべし、木匠は墨を引き張り、朱にて畫き、かんなにて削り文回をもて畫き、これを人の形にかたどり人の美しき容にしたがひて造り而して家のうちに安置す。

或は香柏をきり、或は柳をとり、或は檀をとり、或は林の木の中にて一を選び、或は杉を植ゑ、雨を之て長たしむ而して人これを薪となし之をもて己が身

を暖め又これを燃してパンをやき又これを神につくりておがみ偶像に作りてその前にひれふす、その半は火にて燃やし、其半は肉を煮て食ひ、或は肉を炙りて食ひ飽き又其身を暖めて言ふ、あゝ我あたゝまれり、われ熱きを覺ゆ、斯てその餘りをもて神をつくり、偶像をつくりてその前にひれふし、之を拜み祈りて言ふ、なんぢ吾神也我を救へと、是等の人は知る事なく悟る事なし其目閉がりて見えず、其心とじて明かならず云々。』

痛快ではないか、神を作る同じ材料で飯をたき、身を暖めて、あゝ、よい氣持だと言つて、其作つた木像の前では、命をかけて、願をする、と二千五百年昔のイザヤは惡口ついて、人よ、眼を擧げよ、眞の神を見よと叫んで居る。

僕は、海を渡るには、水天宮の御札、盜人、コレラ、疱瘡よけには鐘鬼樣の繪を軒に張り、火事には秋葉神社の御札をかけ、眼が惡ければ藥師樣に行つて、

べんずり樣の像の眼を擦つた手を自分の眼に當る、年始は氏神樣から何か頂戴すると家内安全、商賣繁昌、何處の宮に參詣しても、寺に行つても、御札を買ひ御眞像を頂いて來るものと思つて居た、そして神棚か、佛壇に祭り上げて、拍手打つか、念珠持つて御祈願申上るものと思つて居た時もあつた。

而し今はそんな事は出來なくなつた、我同胞も迷信だけはもう止めにせぬと大正の今日人の前に恥くて出る事が出來ないと思ふ。

勿論御札や御守りに深い理由もあるかも知れぬ、しかしあつても、其理由を明かにせず、世人をして紙片や畫なんかに、頭を下げしむるは、餘りひどいと思ふ。僕はつく〳〵以賽亞書を讀んで、日本で流行する御札や御守りや又は何何の像なんかが拜まれてるのが、何だか日本が二千五百年も舊い〳〵時代の預言者に馬鹿にせられて居るようで日本人として堪られなかつた。

二一、　井戸の蛙

日本人は井戸の蛙であると云ふ意味かどうだか或外人はこんな話をした。

日本人を喜ばす爲めには三つの事をうまく話せばよい、恐多い事だが、

まづ

「日本帝國は萬世一系の皇室が君臨し給ひ二千五百幾十年東洋の天地に獨特の精華を發揮した豪い國である」と

之で一寸大抵の日本人は我曹を日本通であると、ほめて呉れるのである、第二は、

「富士の山は不二の山であつて世界第一の名山である、其男性美と女性美を具有して太平洋沿岸の美しい綠林白砂の上に聳へて居る姿は、天下の絶景である」

さあ、これで第二の防禦線を占領して日本人の喜びの壘を摩する事となる、即ち例の表情の少い人から笑顔が出て來るのである。

第三は、キモノである、成るべくキマナとか發音する方がよい、何故なれば日本人の興味を澤山起すことが出來るからである。

「キマナ（着物）は世界獨歩の美術的衣類である、其畫の如くひるがへる袂なんかは素敵にいい」と、

これで大抵私は歡迎して貰へる、擔いで呉れるのであると、我曹日本國の民は之以外に誇る處がないのであらうか。

戰爭では世界一であると誇れるが、それだけでは花も實もある東洋の神州とは申されない、武士道！昔のまゝの武士道なるものがあつて、之を復舊しようとしたとて廿世紀の現代、世界の日本では、チヨン髷的學究しか贊成して其復舊工事に當るものはあるまい、新日本の精神的根底は何か？まだないのを遺憾とする。

それで世界の一等國民だと自負するのは、井戸の蛙で、人に乘せられたら忽天上する七千萬となるのだ。

勿論、大戰頃の獨逸は野獸的亂暴をして居る、彼より我は如何程文明的國家であるか解らぬ、しかし國家としての道徳は最上であつても、個人としての精神的根底がなく、ブラ〳〵して墮落の有樣では末餘り頼もしくある筈がない。

一等國の自信は實に我曹の命であるが、それで滿足して了つては井戸の蛙大

海の水を知らぬ愚を繰返すのみである。

現代の我曹同胞の多くは、人として世に生れて來た眞の目的を知らぬから墮落しつゝあるのであらう、眞の人である自覺に達せぬからではあるまいか。

人は誕生日が二つある、一つは肉體の誕生である、そしてそれのみではまだ萬物の靈長たる眞の人間ではないと思ふ。

二番目の誕生は吾曹の精神の眼が開け靈の覺醒をした時である。即ち、神を知りたる時である、

眞の人は井戸の蛙である事が出來ない、

「人々勵みて天國を取らんとす、勵みたる者は之を取れり、」とはイエスの御言である。

神の子なる眞の人は小成に安んじない、力を盡して人として生れて來た目的

を達しようとするのである、勵むのである。

そんならば、人生の目的はなんであらうか、主イエスは譬を以て是を敎へられた。

「また天國は好眞珠を求めんとする商人の如し一の値たかき眞珠を見出さばその所有を盡く賣りて之を買ふなり」

人は如何なる値にても天國を買ふのである、人は未だ天國を見出す事が出來ぬから、其總てを賣放して天國を買はんとする熱心がないのである、心の目開けて眞の人となりたる時は、天國を見出したる時で、何物を捨てゝも、天國に入る努力をするのである、

人生の目的は、現世に於ても未來に於ても、神の國、神の聖旨が完全に行はる國、理想の天國を建設せんものと一生懸命に勵む事である。

神の國を地上に打建つるには、戰爭も全廢しなければならぬ、社會の缺陷を根本より改善しなければならぬ、勿論、廢娼 廢酒は茶飯前の成功を得なければならぬ、警察監獄裁判所の如きは自然不必要となるまで社會の品位を高めなければならぬのである。

空想か狂想かと現代人は吾曹の理想を訴るかも知れない、しかし理想は大なるを要し完全なるを目的とする。

如斯人生の目的を有する眞の人は、何で井戸の蛙ですまして居られよう、何ぞ勵まずして居られようか。

日本帝國は更に更に大發展せねばならぬ。

日本帝國は世界精神文明の魁とならねばならぬ、其有事の際に井中の蛙でゆつてはならぬ即ち吾曹は皆、動物界より超越して、人生の目的を有する、眞

の人とならねばならぬ。

三三、死！

死ぬと言ふ事を考へる程世の中に目出度い事はありますまい。

『元日や冥途の旅の一里塚』と詠じました僧一休は、死と言ふ人生の最も眞面目な大問題を掲げて、あの華かな室町時代の酔ふた様になつて居た日本國民に痛切な警告を與へました、其死の聲を出しましたのは時も時一月一日、處も處も都大路でありました。

私は現代の我國民に此死の問題を提供したいのであります。

人は死すると云ふ事を考へる事が嫌ひであります、知らず〳〵の間に此大切な事を考へず、たゞ目前の事ばかりに追ひまくられて五十年六十年を過して了ひます、そして最後の數時數分間または、一日二日に、何の用意もなくして此大問題を解決しようと、跪きます、それですから正當な死の意義を發見する事が出來ずに、人生は夢であつたと妙な苦しい悟りらしいもので自身を誤魔化して了ふ樣な、悲慘な目に合ふのであります。

人生は事實であります、浮いた〳〵世の中に私共は生活して居るのではありません。

私共は死と言ふ事を眞面目に考へねばなりません、そしてそうする事が最も目出度い事であります。

キリスト教の旗印は十字架であります磔刑柱であります、血と死の印であり

ます。

西洋では昔しからイエスを愛の權化とし、其最も強く顯れた愛の光は十字架上のキリストが其敵が與へたすべての侮蔑、すべての嘲弄、すべての屈辱に對して

『父よ彼等を赦し給へ、其爲す所を知らざるが故なり』

と言ふて、最後迄其愛を貫かれたが故に、十字架の印は愛の印となりました。遂には女の襟に黄金やダイヤの十字架が光つたりする樣になりました、歐洲の諸國は其國旗に十字架を附けて居るのが澤山あります。

赤十字の印は誰知らぬものもありますまい、これは慥かに十字架の意義の一面であります、しかし、吾曹は十字架が嚴肅な死の旗印である事を忘れてはなりません。

死と云ふ事を考へるほど目出度い事はありませぬと再び記します。

死を思ふときは道樂者も道樂を止めて眞面目になります、高慢も鼻が折れます、理屈屋も空威張りが出來なくなります、怠けものも働き出します。

今日で最後の一日である、今生の思出に一大奮戰をしようとする、大勇猛心は死と言ふ事から起つて來るのであります。

昔、貝原益軒は、武士の道は死を心掛るにありと申しました、至言であります、金言であります、キリストの救とは、キリストが世の爲人の爲めに其高潔無垢の身を磔柱にかけられても、かまはずに盡された如く、死なれた如く、吾曹も死ぬ事であります。

キリストの教に入る事は死ぬ事であります、死んだ經驗のないものはキリストの弟子ではありません。眞の信者ではありません。

世の中の、總ての野心、總ての樂しみから死んで、たゞ其身も靈も神に託し奉るときに眞のキリスト信者となる第一歩を運ぶのです、

そして堂の奥に達するには、其神に託して了つた身靈を、一切神の御攝理の道具として神に絶對服從を決行するのであります。

つまり、吾曹は現世に死んでキリストと共に生きるのであります。

パウロが『爾曹キリスト・イエスの意を以て意とすべし』と其手紙の内に認めました處を實行するのでありまして、その結果死生を超脱して、神と共に在る生活に突入するのであります。

そして眞の人となり眞の意義に於て目出度い生涯を送る樣になるのであります『十字架をとりて我に從へ』とのイエスの言を一言に申しますと、『我と共に死ね』との命令であります。

死と言ふ字に吾曹は新しい意味を發見したいものであります。

三三、破產

商人は約束手形を發行すると其手形の爲四苦八苦を重ねても期日に其約束を履行しなければならぬ、何とか決濟しなければ、信用滅失、强制執行、破產と言ふ谷底に見る〳〵墜落するのである。

人と人とが事を約束した時は大抵其通り割引なしに履行せらるゝのであつて、若し約束を守らないなれば、人並に世間へ顏を出す事が出來ないのである。

世の中の德義は守らねばならぬ事、人前に憚る樣な事は避けねば損であると

言ふ考は日に弘まつて行く。

此時に不可思議の現象、否事實がある、吾曹の內的生活に「約束」と云ふ事が甚だ屢々繰返されてそして大概皆「不履行」と云ふ闇に葬られて了つて居る、そして餘り其結果を苦にしないのである、心の內に我と我が身が約束をして、斷然是々の惡習慣は止めてしまつて明日から新らしい人とならうとか、今日から善事を積んで見ようと決心をする、そして其振出した約束手形を反古にして了ふ、自己の意志は信用滅失、破產の憂目を見つゝあるのに猶知らず顏に過す事が多いのである。

自ら己を信せずして何事が出來るであらうか、それに自ら己の信用破壞をして何とも思はないのは如何にも愚であり且不思議である。

キリスト・イエスは『誓ふ勿れ』と敎へ給ふた、キリスト信者の生活は約束手

形を振出さない着實なる生活である、明日から悔改めようと決心する事でなくして、只今悔改めるのである。

『凡て勞れたる者また重を負る者は我に來れ我爾等を息ません』と曰ふ、イエスに我一切の過去を預けて了つて大勇猛心を起して新生涯に突入し、直ちに生れ更るのであつて、生れ更る事を約束しないのである。

人間であるから其向上の道に失敗する事がある。折角の努力も水の泡となり果たと號泣しなければならぬ時も來る、其時になつてもキリスト信者は約束や誓ひをせないのであつて、直ちに神に面接して生れ更るのである、『最早我生くるに非ずキリスト我にありて生る也』といふ自覺を得る迄幾度も生れ更りを實驗するのである。生れ更りの實驗！之がキリスト信者の向上の一路である、靈的破產墜落より助かる救の網である、苦しい實驗であるけれども味はなければ

ならぬ。

吾曹は日々新になり今日は昨日より明日は今日より進歩したる吾曹とならねばキリストを信ずと言ふとも嘘である。

二四、黄金と人生

金が欲しい、巨萬の富があつたなら世の中は樂しい事であらう、何でも錢儲けをして時めかねばならぬ、目的の爲めには手段は選ばぬ、非道の事でも人に知れずにやつて居れば構ふものか、大にやるべしと骨を粉にし血の汗を滴らして日を送つて居る者は至る處に滿ちて居る。

四百四病以上の難病也と貧乏を苦にして不平不滿の輩もある、縊死するものもある。

貧すれば鈍する也と悟つて向上の路を歩む心を失ふものもある。

兎角、浮世は金が光る、黄金が佛であると、黄金萬能主義の信者が多い。

『金の切れ目が縁の切れ目』、『金が言はする旦那樣』と諺にある通り、此の世は金ばかりでは渡れぬ處である事を萬人は薄々承知して居るが、矢張り、たゞ金、金と憧がれて行き、金が得られないなれば、大概の人は失望落膽、氣が抜けた人か、或は獨り善がりのすねものとなつて了ふ。人生は先づ、黄金と言ふものと善との關係を最も明白に承知して置く大必要がある。

現代は昔ではない、人口は鼠算で增殖するが土地から得る食物は、其割合に收穫が增加しない、是は昨日より今日、今日より明日と生活が困難になつて行

く事を最も痛切に敎ふるのである。

社會に秩序がつき敎育が普及されると昔の如くに一握千萬金を得る事が出來ない、風雲に乘じて巨萬の富を得る機會が減少して行くのである。

蓄積された富力は更に發展するかも知れないが、赤手空拳では何事をなす事も餘程六ヶ敷い、そして吾曹平民の大部分は富者でないのである、それで現代に於て富まなければ生き甲斐がないと信ずる人は非常に不幸の人であり且危險人物であると思ふ。

たゞ金を儲けて溜めよう、貯へよう、金を與へよ、然らずば死を與へよ、と叫ぶ金の亡者は、金の餓鬼は、其目的とする黃金を手にすると同時に、哀れ金の鎖に手足を縛られた金庫の番人、物質世界の奴隷となつて浮ばれない闇の人となつて了ふこと瞭かである。

子孫の爲めに其田を買ふて其可愛がつた子孫が其富の爲めに腐敗し墮落して了ふ事が度々ある。

金はダイナマイトの樣なものである、之をよく用ふると、人力で如何にもする事の出來ぬ巖石を粉破微塵とする事が出來るが、やり損ふ時はダイナマイト使用者を爆聲と共に殺して了ふ。

金は使用法を知らぬ人に取りて、最も危險なるものである。

されば如何にすれば金を得ずとも幸福なる生活をなし、金を得た上は其使用法を充分悟る事が出來るだらふか、聖書の內から處々を選んで考へて見たい。

『富る者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し』とイエスは曰はれた。金の奴隷たるよりは、淸貧にして自由の天地に生活する方が、人間として何程の値ひある事であるか解らない。

人生に於る眞の樂みは金で買ふ事が出來ぬ。

『睦じうして一塊の乾けるパンあるは、あらそひありて宰れる畜の盈たる家に愈る』『家貧して孝子出づ』仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、撙節等の美しい果は金で買ふ事が出來ぬのである。

人生の目的は、天國を地上に吾曹が神と共に働きて建設するにあり、此爲めに、何とも犧牲にして顧みないとする生活は、金の奴隷となる事が出來ぬ生活である、此目的を有する者はキリストに屬する者である。聖書に、『夫キリストに屬する者は肉と其情および欲とを十字架に釘けたり』とある。吾等は金を得ん爲めに働くのでなく、金を得て神の爲めに使用せんとして日々額に汗するのでなければならぬ。

『命あつての物種』と昔の人が言ふて居るが實に人生に大切のものは健康と

云ふものである、其健康も金で買へないものである、證據に、金持ちでも病氣で困る人が多い。健康は食慾、怠惰慾、色慾、等の慾に打勝つ克己心即ち靈の力によるのである。

病人も精神療法によりて愉さることが多い、必ず全快すべしと信じ切つたる人は滅多に死なぬ人である、神を信じて、自己は必ず此世に盡す使命がある、自分を死なしめ給ふは、神の御損也、とまで深い確信がある人は瀕死の床中にも希望を有して居る、そして希望の輝く處には死の陰が遠かるのである、イエスが病人を愉し給ふて曰ふた言に、『爾の信なんぢを救へり』とあるは何たる福音であらふ。富者ばかりが病より愉さるゝのではない、否富者の信仰なきものよりも、貧しき者の信仰ある人が、より多く現世に於て愉され健康者であるのである。

『食過して死するものは多し、然れども餓死するもの少し』と誰かが言ふた。金の爲めに精神的に葬らるもの多しと吾曹は叫びたいのである、警告したいのである。

キリストは貧乏であつた、一介の大工であられた、羅馬の帝王は世界の絶對專制君主であつて無上の富者であつた、キリストは今に活き給ひ、羅馬代々の帝は肉の亡ぶると同時に滅し去つた。

『貧者は幸也、神の國は爾等の所有なれば也、爾等富る者は禍なる哉すでに安樂を受れば也、飽る者は禍なる哉、餓んとすれば也、』（路可傳六章）

富者は必ずしも福でなく貧者は必ずしも苦痛を受くものではない、たゞ人の心の狀態によつて福ともなれば苦ともなるのである。

神の國を地上に建つる爲に奮鬪する富者は幸ひである、神の國を地上に建つ

る爲に活動して止まぬ貧者は幸であると此論を結びたいのである。

二五、日本帝國よ、禁酒すべし（大正四年稿）

私は大正の今日、酒は百毒の長であると其効能でない惡能を書き立る必要がないと信ずる、聰明なる我日出の帝國民は既に既に飲酒の弊を知つて居るのである、或人が日本で年々酒の爲めに卽ち毒飲料の爲めに支拂ふ勘定書を提出した。

一酒代　二六五、四八八、一七五圓

記

一酒税徴收費　一、七二〇、六五七圓
一監獄費の一部　三、四五七、一八七圓
一裁判費の一部　九五〇、三六〇圓
一二日酔の休業損金　二三、五五三、一三五圓
合計二億九千五百拾六萬九五一四圓（大正十五年には此金額が約四倍になつて居る）

驚く勿れ、我帝國民は年約三億の金を惜氣もなく有害無益に棄てゝ居るのである帝國が禁酒するならば其重荷である外債は數年ならずして消却する事を得、帝國が禁酒するならば毎年弩級戰艦の十隻を新造することが出來、帝國が禁酒するならば現代の學生の爲年額一千萬圓を費す大學を三十經營する事が出來るのである、我同胞は忠君愛國の精神にかけては世界に冠たる意氣と覺悟を有して居る、事にあたつて生命を鴻毛の輕きに比して腹一文字に血を濺たらせて、

護國の鬼と化する事すら辭せない筈である。

私は決死の覺悟を以て我日本帝國を愛する同胞が絶對に帝國禁酒を斷行せしむる事をこひねがふ者である。

我日本の最大の强敵は歐洲にあらず、南北米洲にあらず亞細亞大陸にあらずして、其獅子身中の虫である酒と黴毒である。

去年八月歐洲亂れて古今未曾有の大事變を惹起した時に、我隣邦露西亞は皇帝ニコラス二世陛下の名を以て斷然八月一日より八月二十五日迄一切のアルコール含有飲料を禁ずと青天に霹靂の如く其大酒惡酒を以て聞えた露西亞全國民に對して禁酒令を發した。

露西亞は政府が酒類專賣をして居つたのであるから禁止をした時に全國何處に至るとも酒の一滴を買ふ事が出來ないことになつた。